

かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書

高松市鬼無町是竹所在の円墳の調査

1986. 3

高松市教育委員会

序

現代は激動の時代といわれていますが、経済の安定化とともに、文化の重要性に対する認識が国民の間に浸透してきているように思います。

それだけに、わたしたちは、地域の文化財を大切に、保存を図り、豊かなふるさとづくりに努めなければなりません。

このたび、高松市鬼無地区等一带とした勝賀地区農免農路建設が香川県の事業として計画されました。この道路は農業の近代化のために欠かすことのできないものでありますが計画の中にある鬼無町是竹のかしが谷2号・3号古墳の発掘調査が緊要のものとなりました。そこで、香川県教育委員会等と協議し、発掘調査を実施することにいたしました。

調査は、香川県中部土地改良事務所の委託を受け、昭和60年6月から実施し、調査結果を本報告書にまとめました。

調査にあたっては、香川県土地改良課・香川県中部土地改良事務所、土地所有者をはじめ地元鬼無地区の方々、および文化財関係者等多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

高松市教育委員会
教育長 三木 義夫

例 言

- 1 本書は、高松市教育委員会が香川県中部土地改良事務所の委託を受けて実施した発掘調査報告書である。
- 2 調査対象の〈かしが谷2号墳・3号墳〉は、高松市鬼無町是竹 597-1、596-10、596-3に所在する。
- 3 調査にあたっては、土地所有者、泉保起美・本津正則両氏の、御理解と御協力を得た。
- 4 委託者である、香川県土地改良課・同中部土地改良事務所には、多大の御便宜をいただいた。
- 5 地元自治会、地元土地改良組合、また勝賀史談会をはじめとする住民諸氏の御尽力と、あわせ、高松市土地改良課の御助力をいただいた。
- 6 香川大学名誉教授、藤井公明氏、香川大学助教授、丹羽佑一氏、香川県文化行政課の調査指導をいただいた。
- 7 調査関係者は、下記のとおりである。

教 育 長 三 木 義 夫	文化振興課長	河 原 徳 安 (総括)
教 育 部 長 大 平 照 正	文化振興課長補佐	大 西 隆 雄 (総括)
教 育 部 次 長 清 谷 圭 一	文化振興課主事	藤 井 雄 三 (調査)
	” 嘱託	江 木 麗 子 (調査)

- 8 調査全期間において、市内在住の末光甲正氏の参加を得た。
- 9 現地調査は、大西総括のもと、藤井、末光、江木があたった。
- 10 地形測量は、四国調査設計例に業務委託のうえ、実施した。
- 11 整理作業は、大西総括のもと、藤井、末光、江木があたった。
- 12 発掘作業は、地元の方々等の協力を得た。
- 13 本報告書の第Ⅶ章のため、丹羽佑一氏より寄稿をいただいた。
- 14 本報告書の執筆は、第Ⅶ章以外は、藤井が担当するとともに、末光、江木の協力を得、編集も行った。
- 15 写真は末光にトレースは江木による。

本文目次

本文

第I章	調査の経過	1
第II章	環境	3
	1 地理的	3
	2 歴史的	3
第III章	かしが谷2号墳	10
	1 墳丘	10
	2 主体部	15
	3 遺物	25
第IV章	かしが谷3号墳	26
	1 墳丘	26
	2 主体部	28
	3 遺物	31
第V章	かしが谷古墳群	32
	1 かしが谷1号墳	32
	2 かしが谷4号墳	32
	3 その他	32
第VI章	かしが谷古墳群について	34
	香川県内円墳・方墳一覧表	38
第VII章	笠居郷の古墳	45

挿 図 目 次

第1図	今岡古墳を穿む	2
第2図	遺跡分布図	4
第3図	かしが谷古墳群測量図	8
第4図	かしが谷古墳群発掘区測量図	9
第5図	かしが谷2号墳墳丘測量図	11
第6図	かしが谷2号墳外護列石実測図	12
第7図	かしが谷2号墳外護列石高壁状況実測図	13
第8図	かしが谷2号墳竅穴式石室土層図	16
第9図	かしが谷2号墳竅穴式石室実測図	17
第10図	かしが谷2号墳竅穴式石室上面実測図	19
第11図	かしが谷2号墳竅穴式石室基礎石実測図	19
第12図	かしが谷2号墳竅穴式石室基礎実測図	19
第13図	かしが谷2号墳箱式石棺最下段蓋石実測図	22
第14図	かしが谷2号墳箱式石棺棺内・墓壇実測図	22
第15図	かしが谷2号墳箱式石棺実測図	23
第16図	かしが谷3号墳墳丘測量図	26
第17図	かしが谷3号墳小型竅穴式石室実測図	27
第18図	かしが谷3号墳出土遺物実測図	27
第19図	久米池南遺跡小型竅穴式石室実測図	28
第20図	かしが谷3号墳粘土床実測図	30
第21図	かしが谷古墳群土層図	33
第22図	香川県内田境・方墳一覽表に係る分布図	36
第23図	香川県内の主要前方後円墳分布図	47
第24図	香川県内の沿岸古墳群と内陸古墳群との関係図	48
第25図	香川県内の前方部盛土積石塚古墳と前期末から中期初頭の主要古墳分布図	49

図 版 目 次

第1図	(1) かしが谷2・3号墳遠景	55
	(2) かしが谷2・3号墳近景	55
第2図	(1) 調査前(2号墳墳丘)	56
	(2) 調査前(尾根先端)	56
第3図	(1) 調査風景	57
	(2) 2号墳第1主体部・第2主体部	57
第4図	(1) 2号墳第1主体部上面	58
	(2) 2号墳第1主体部基底部	58
第5図	(1) 2号墳第1主体部墓壁・粘土床	59
	(2) 2号墳第1主体部粘土床断面	59
第6図	(1) 2号墳第2主体部粘土被覆状況	60
	(2) 2号墳第2主体部上面	60
第7図	(1) 2号墳第2主体部墓石除去後	61
	(2) 2号墳第2主体部頭部小口	61
	(3) 2号墳第2主体部足部小口	61
第8図	(1) 2号墳外護列石崩壊状況	62
	(2) 2号墳外護列石	62
第9図	(1) 2号墳外護列石(側面)	63
	(2) 2号墳外護列石(上面)	63
	(3) 3号墳第1主体部・第2主体部検出状況	63
第10図	(1) 3号墳第1主体部上面(頭骨出土状況)	64
	(2) 3号墳第1主体部断面(頭骨出土状況)	64
	(3) 3号墳第1主体部鉄鏃出土状況	64
第11図	(1) 3号墳第2主体部上面	65
	(2) 3号墳第2主体部断面	65
第12図	(1) 発掘状況	66
	(2) 鉄鏃(3号墳第1主体部出土)等	66

1 調査の経過

かしが谷古墳は、高松市西部に所在する前方後円墳として早くから知られていた。特に、石清尾山と対峙する前方後円墳群の一墳としての評価を受け、注目されていた。しかし、近年現地を訪れた埋蔵文化財関係者のなかには、その地形等から疑問とする意見も少なくはなかった。

古墳が所在する勝賀山裾一帯は、ミカン栽培を中心とした果樹園地帯で、昭和55年ごろ営農の効率化を目的とした農免道路建設の要請が、高松市北西部の鬼無・香西・下笠居からおこなわれた。香川県土地改良課、香川県中部七地改良事務所の指導を受け、高松市土地改良課では、地元関係者と協議のうえ、ルート選定を行った。かしが谷古墳周辺の勝賀山東麓の路線原案が完成したのは、昭和57年ごろのことである。

ところが、路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地である「かしが谷古墳」が存在することが判明した。土地改良課と協議のうえ高松市教育委員会では、古墳自体に不明瞭な点もあるので、昭和58年7月に、試掘調査を実施した。その結果、竪穴式石室と箱式石棺が検出されたので、早急に埋戻しを行った。その後、路線変更や工法の変更等の検討が行われたが、本格的な発掘調査が必要であるとの結論に達した。

発掘調査は、香川県中部土地改良事務所の委託を受けた高松市教育委員会が、担当実施した。他の発掘調査等により断片的な調査となったが、日程は、次のとおりである。

昭和60年5月24日	委託契約締結
昭和60年6月1日	伐開作業
昭和60年6月15日～7月31日	測量作業（委託）
昭和60年6月17日～9月27日	発掘作業（途中、木太町白山神社古墳緊急調査のため中断）
昭和60年12月1日～昭和61年3月初旬まで（予定）	整理作業（本格的作業期間、それ迄は断片的に作業を進行）
昭和61年3月中旬（予定）	埋戻作業（保存問題の提起が、地元からなされたため）

昭和61年2月28日記

調査にあたっては、土地所有者の本津正則、泉保起美両氏、地元関係者、土地改良関係者、作業員の、「ひとかたならぬ御協力をいただいた。また、原稿をいただいた丹羽佑一助教授をはじめ、文化財関係者の方々の御指導にも、感謝いたします。



第1図 今岡古墳（矢印）を望む

II 環 境

1 地理的

高松市北西部、現在の鬼無・香西・下笠居の三地区は、古くは笠居郷と呼ばれていた。中世には、管領細川氏の有力被官香西氏の本拠地として繁栄した土地柄である。

三地区の境界に座し、東方からみれば台形状の山容を呈す山が勝賀山で、笠居郷の象徴的な存在でもある。標高364mの平坦な頂上付近には、香西氏の本城勝賀山城の遺構が明瞭に残り、中世城郭研究の好資料を提供している。かしが谷古墳群は、香西氏が天険と頼んだ急斜面が山裾の緩斜面に変化するあたり、標高80m余の尾根先端付近に所在する。奥まった位置ではあるが、周囲の尾根が低いため麓からみれば目立った存在である。

周辺は栗樹園に開墾されているものの、かしが谷古墳群の所在する尾根のみは雑木林で残されている。箆尾根でかつ急峻なためであろう。

尾根の北と南にみられる谷のうち、前者は特に深く切れ込み、小渓谷の感さえ早する。地元では、かしが谷と通称する。本古墳群の名称の由来も、ここにある。

かしが谷古墳群所在地から東にひらけた眺望は絶景といえる。前面には、積石塚古墳で有名な石清尾山塊が、高松平野の真只中に横たわり、その東裾を洗うように北流するのが、高松平野最大の河川香東川である。また、勝賀山と石清尾山塊の中程を香東川と並流するのが、本津川である。香東川と本津川の両河川によって形成された平野は、遠く南にひろがる。なお、本津川は勝賀山の南につらなる袋山付近で分流し、西方の五色台の南園分に源を発する。

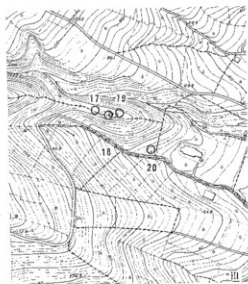
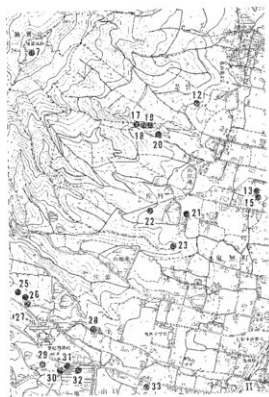
石清尾山塊北端から勝賀山の東北に位置する芝山を経て、勝賀山北方の串ノ山の東裾を結んだ線が、現在の海岸線である。もちろん古墳時代のそれは現状より南に少しばかり後退するであろう。

串ノ山の東裾から勝賀山背後に走る小河川を伴古川と呼ぶ。さらにその東方には、高松市と坂出市の境界をなす五色台がひろがる。標高約400m級の山がつらなる台地状の地形で、勝賀山もその一角に含まれる。

芝山から西へと展開する地形はかしが谷古墳群からは望見できない。

2 歴史的

旧笠居郷を中心とした地域では、旧石器・縄文時代の遺跡分布は稀薄である。ただし、五色台の一角に所在する国府台遺跡は、原石の散乱と、多量の石器の出土で注目される。



第2図 遺跡分布図

縮尺 I、S=1/100,000

II、S=1/20,000

III、S=1/5,000

方位、いずれも上方が北

遺跡分布圖地名表

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 小原遺跡 | 37 同府台遺跡 |
| 2 武峰城跡 | 38 四分寺跡 |
| 3 横立山経塚古墳 | 39 園分尼寺跡 |
| 4 彈正原古墳跡 | 40 御殿大塚古墳 |
| 5 原経塚古墳 | 41 御殿天神社古墳 |
| 6 桑崎古墳 | 42 半田・小坂塚群 |
| 7 勝賀城跡 | 43 紙漉塚群 |
| 8 住吉神社古墳 | 44 青木塚群 |
| 9 勝賀庵寺跡 | 45 稻作牛塚古墳跡 |
| 10 藤尾城跡 | 46 王墓 |
| 11 是竹薬師遺跡 | 47 石清尾山塊古墳群 |
| 12 沢池古墳 | 48 北大塚・北大塚古墳群 |
| 13 佐料城跡 | 49 鎌塚古墳 |
| 14 佐料遺跡 | 50 石船塚古墳 |
| 15 佐料遺跡、土器出土地 | 51 姫塚古墳 |
| 16 かしが谷古墳群 | 52 猫塚古墳 |
| 17 かしが谷1号墳 | 53 石清尾山9号墳 |
| 18 かしが谷2号墳 | 54 摺鉢谷東古墳群跡 |
| 19 かしが谷3号墳 | 55 鶴尾神社4号墳 |
| 20 かしが谷4号墳 | 56 御殿古墳群 |
| 21 貴船池下塚跡 | 57 野山古墳群 |
| 22 善師塚古墳群 | 58 淨願寺山古墳群 |
| 23 今岡古墳 | 59 南山浦古墳群 |
| 24 神高古墳群 | 60 ガメ塚古墳跡 |
| 25 平木1号墳 | 61 稲荷山姫塚古墳 |
| 26 平木2号墳 | 62 稲荷山北端古墳 |
| 27 平木3号墳 | 63 下ノ山遺跡 |
| 28 大塚古墳 | 64 摺鉢谷遺跡 |
| 29 古宮権現社古墳 | 65 坂田庵寺跡 |
| 30 こめ塚古墳 | 66 片山池窯跡 |
| 31 神高池北西古墳 | 67 特別名勝栗林公園 |
| 32 神高池古墳 | 68 史跡高松城跡 |
| 33 山口神高氏宅前塚跡 | 69 女木丸山古墳 |
| 34 相越古墳 | 70 天満遺跡 |
| 35 袋山古墳 | 71 白山神社古墳 |
| 36 衣掛古墳 | 72 大池遺跡 |

弥生時代前期及び中期中葉ごろまでの遺跡は未発見である。最も早い事例は、中期末に比定される岩跡谷遺跡があげられよう。石清尾山塊山頂部に所在する高地性集落である。

かしが谷古墳群裾下にひろがる集落・佐料一帯には、遺物の散布が確認されている。佐料遺跡と呼ばれ、弥生時代後期・古墳時代初期・奈良時代そして中世の各時期に属する土器片が採集される。また、楚竹葉師遺跡でも、後期後半の土器が一括出土した。勝賀山東麓から西麓の香西・下笠居や、本津川・香東川流域にも、弥生土器出土の記録や間接的証拠が知られており、弥生遺跡の増加は必至である。

その他、石清尾山北端下ノ山遺跡で銅鉾二口の出土が知られるが、位置も含めて詳細は不明である。

古墳時代から中世以前の散布地は、佐料遺跡以外、2～3ヶ所知られるのみである。弥生時代の遺跡同様、将来の調査によって増加するものと思われる。

古墳の数は、比較的多い。近辺では、まず石清尾山塊古墳群があげられる。双方中門墳や前方後円墳等の積石塚古墳が集中することで著名である。なかでも、最大規模の双方中門墳・猫塚古墳は、かしが谷古墳群の東方に横たわる石清尾山塊の中程に立地し、良く望見できる。庄内期に比定される土器を出土した前方後円墳・鶴尾神社4号墳や、剣板式石棺を主体部にもつ前方後円墳・石船塚古墳は、猫塚古墳の東南、東北方向に位置するが、かしが谷古墳群からは見られない。

石清尾山塊南端の石清尾山塊古墳群中唯一の盛土前方後円墳であったガメ塚古墳跡も遠くに臨める。

積石塚古墳は勝賀山の西側、住古川沿いの高台にも存在する。勝賀山北西麓に所在するのが、墳形不明の原経塚古墳で、谷を隔てた五色台の中腹に前方部盛土の前方後円墳・横立山経塚古墳が所在する。

かしが谷古墳群の東南約650m、勝賀山から東に最も突出する尾根先端に所在する前方後円墳が今岡古墳で、高松平野の代表的中期古墳である。かしが谷古墳群とは指呼の間に深い関係をうかがわせる。

本津川中流を臨んで、前方後円墳・御経天神社古墳が立地する。その他、袋山周辺に所在する袋山・衣掛・相越の三古墳は、いずれも前方後円墳と考えられているが、実態は不明である。

以上の古墳は、前期もしくは中期中ごろには出現していたと推察できる。

中期後半から後期前半に属する古墳には、香東川と本津川にはさまれた微高地に位置した相作牛塚古墳があげられる。時期は不詳であるが、串ノ山から東にのびた尾根上の住古神社古墳も後期前半までには出現していた古墳である。

相作牛塚古墳跡周辺、香東川・本津川沿いには塚状の高まりが多く見られる。確認されてい

ないが、相作牛塚古墳のほかにも古墳が存在すると思われる。

後期後半から終末にかけては、この地域にも横穴式石室を主体部に採用した小規模な古墳が多く構築される。特に、石清尾山塊の南のピーク淨願寺山頂には、50基余の横穴式石室墳が集中する。その他、石清尾山塊には横穴式石室墳が数基でまとまる傾向がある。

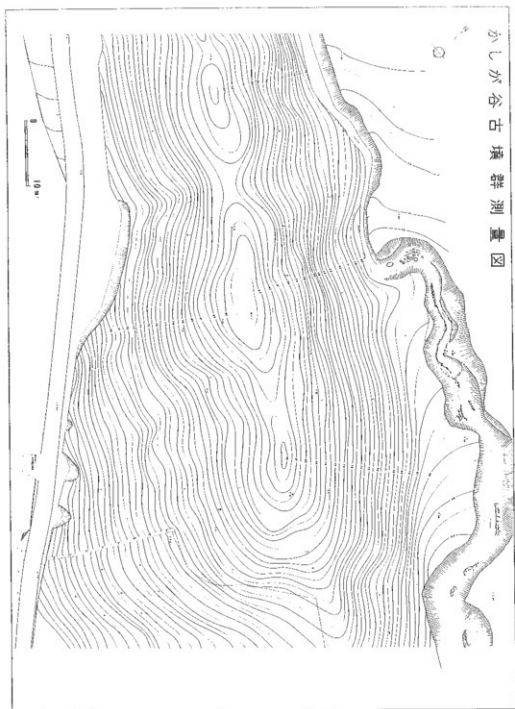
本津川が分流する付近に単独で所在するのが、御厩大塚古墳で、平地に半壊した巨大な横穴式石室をさらしている。これを凌駕する横穴式石室墳には、古宮権現神社古墳があげられる。加えて、袋山の北側には比較的大型の横穴式石室墳、大塚・平木1号墳等10基余が散在し、神高古墳群と呼称されている。

また、現在は失われているが、勝賀山東麓の谷南斜面には、善師垣古墳群、かしが谷4号墳、沢池古墳が存在した。こうした横穴式石室は、勝賀山西麓・住吉川流域にもみられる。彈正原古墳と、桑崎古墳で、前者はかなりの規模の横穴式石室であったが、地震により倒壊した。

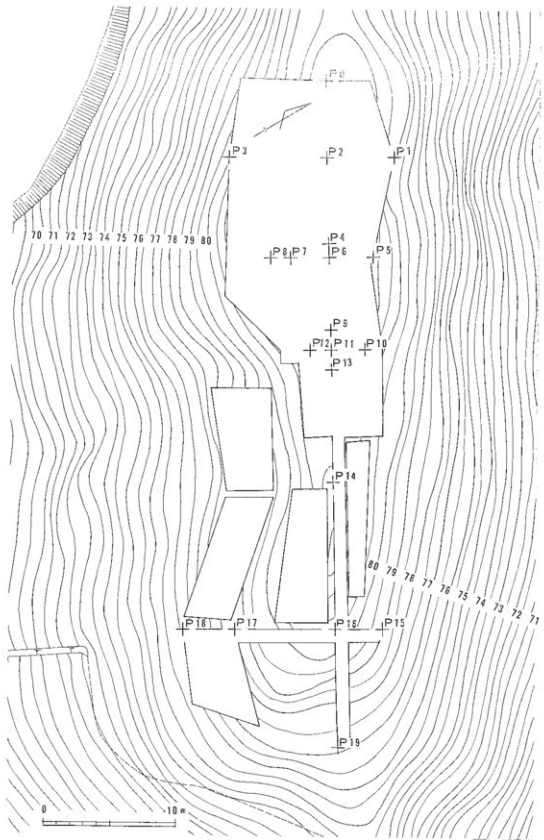
古墳時代以降の遺跡には、師楽式土器を出土した小原遺跡や、先述の佐料遺跡、さらには、勝賀山北麓の古墳の空白地帯に出現する勝賀庵寺跡が注目される。また、笠居郷からは、因分寺、因分尼寺のうち、特に後者とは至近距離にある。

中世になっても、笠居郷には遺跡や城跡が多く残されている。勝賀城・佐料城・藤尾城・黄峰城等、いずれも香西氏関係の城郭で、戦国時代の縄張りやを良く残す。

以上、旧笠居郷とその周辺の主要遺跡を列記した。全体、特に古墳時代に主眼をおいた考察は、丹羽氏の稿に譲り、本節は重複をさける。しかし、笠居郷が、弥生時代終末から開発が爆発的に進み、高松平野における有力地域として成長を遂げたといえる。



第3図 かしが谷古墳群測量図



第4図 かしが谷古墳群発掘区測量図 —9—

Ⅲ かしが谷2号墳

1 かしが谷2号墳墳丘

本古墳は、従来全長40m余の前方後円墳とされていた。本調査で、かしが谷2号墳とした部分を後円部、それより東の尾根を前方部と考えたためである。

しかし、伐開後の地形観察では前方部にあった尾根は途中からやや南にふる様に観察できたため、自然地形と判断できた。さらに、2号墳東側墳裾に外護列石が検出されるに及んで、かしが谷古墳は、前方後円墳でなく、円墳と確定できた。2号墳の東側に、周溝を伴う3号墳が発見されたことは、その裏付けにほかならない。

現況では、かしが谷2号墳墳丘には盛土が認められない。外護列石の構造や壑穴式石室のあり方から、築造時の盛土は想像できるものの、主体部の墓塚が露岩を穿つとともに箱式石棺の天井石が遺存することを考慮すれば、最高20～30cm余の薄い盛土と推定できる。

かしが谷2号墳墳丘の大部分は、元来の縮状地形に整形を施したもので、その際生じた花崗土を盛土として利用したと考えられる。そのため、固く敷きしめることが十分できず、あわせて古墳の南北が急斜面のため、盛土は急速に流出したのであろう。

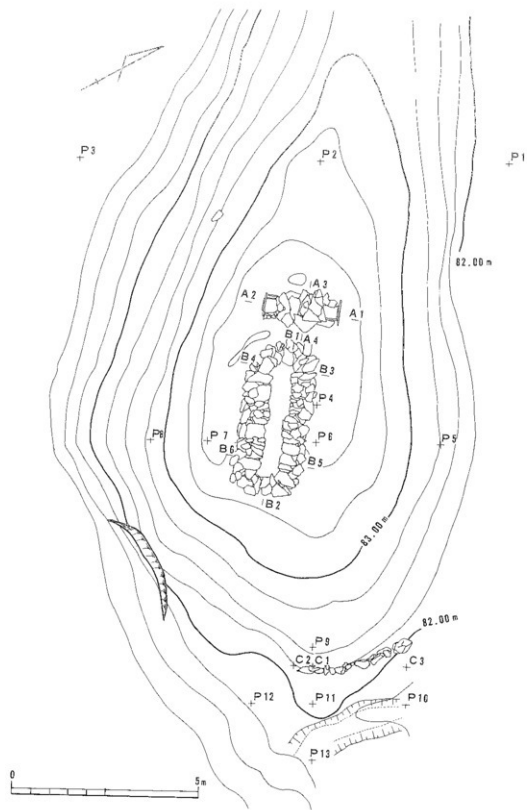
なお、地山は花崗岩岩盤と、その風化したパイラン土層—花崗土—に大別できる。岩盤は風化直前で、墳丘とその周辺に観察できる。墳丘南斜面から墳頂部にかけては顕著で、後述するように主体部はこの岩盤を穿って設けられている。

墳丘東裾に拾数cmから数拾cmの大きさの塊石からなる集石が、帯状に発見された。東西2m、南北5mを測る集石は、墳裾外護列石が崩壊したもので、その大部分が赤黄色粘質土層に含まれていた。集石は尾根筋ほど厚く、南及び北では散在するに過ぎない。多くの石材が、急斜面のため転落したと考えられよう。

崩壊した石材を除去したところ、弧を描く列石が検出された。一部は、2段ないしは3段、高さ30cmに積み重ねられていた。古墳の墳裾にめぐらされた外護列石である。

先述したように、外護列石の遺存部分が弧を描くことから、かしが谷2号墳は円墳と確定できた。

外護列石の構築は、地山を鈍角に削り、その結果生じた面に石材をもたせかける。従って、基底部は同一レベルに保たれている。塊石は横に使用して積み上げるが、集石の量から推察して、現存最高30cmより少し高い外護列石が想定できる。また、塊石間に生じた隙間には幼児の拳大の石材がつまこまれ、外観に配慮が払われている。対して押え積みは、現状では確認でき



第5図 かしが谷2号墳丘測量図

ず、外護列石の維持について十分な配慮がなされなかった可能性もある。

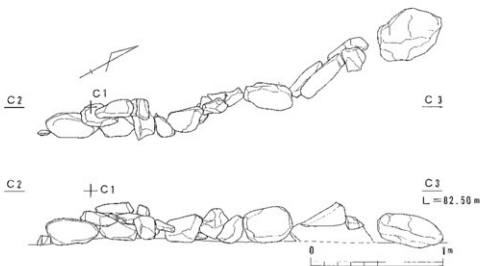
外護列石に使用された石材は、後述する室穴式石室の使用石材と同様、角は磨耗するものの硬が残る安山岩が大部分である。これらは、尾根の両側の谷底に多く見られる塊石と同質のものである。しかし、2・3点ごく稀ではあるが、角・稜ともに磨滅した砂岩質の石材もみられた。麓から運ばれたものであろう。

先述したように、石材の多くが同一土層に含まれることから、外護列石の崩壊は、急速かつ短期間に起こったと推察できる。不安定な構築方法、流出しやすい盛土、南と北側が急斜面等、幾つかの悪条件が重なりあったためであろう。

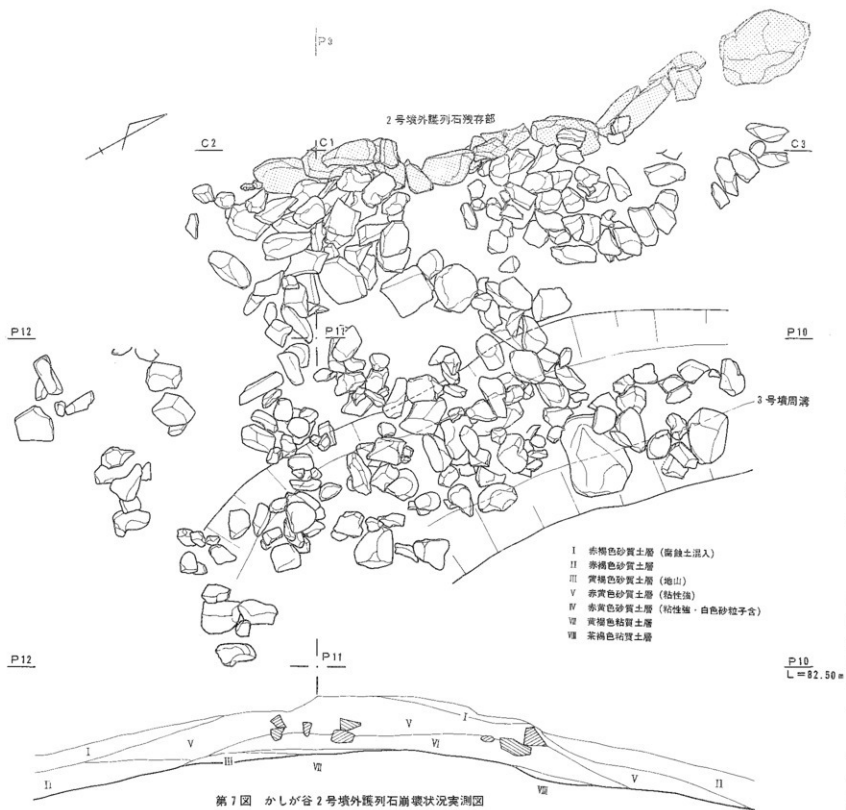
墳裾にあたる外護列石は、東側で明瞭に観察できるのみで、他は痕跡さえも認められない。急斜面を呈する北および南側では、外護列石が設けられていたとしても、早期の流出は疑いなくである。なお、南側斜面西よりに、東側の外護列石の用材とほぼ同じ石材が、1ヶ所で確認できた。南斜面にも外護列石が設けられていた傍証であろうか。

墳丘南側の等高線は弧を描くのに対し、反対北側のそれは直線的で、しかも前者に比べやや急斜面である。これは北側の浸蝕が顕著なため墳丘が変形をうけたとも考えられるが、築造前の地形が現況に近かったとするのが妥当であろう。

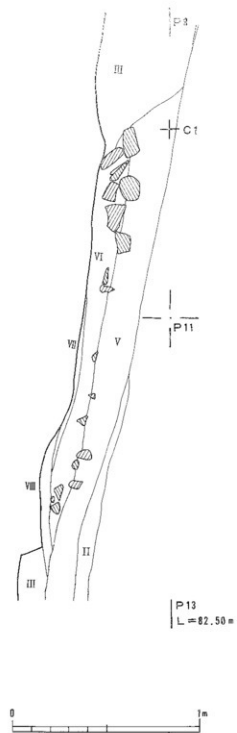
一方、尾根上方に続く西側は、墳頂部から漸次低くなるものの特別な地形変化は認められず、かしが谷1号墳墳裾との鞍部に至る。なお、鞍部が崩溝となる可能性があるが、2号墳の周溝と考えるより、1号墳のそれであろう。墳丘の西側斜面部は地形や断面観察による限り、地山に手を加えた痕跡も認められず、当初の自然地形のまま放置されたと見させる。風化直前とはいえ岩盤を穿った主体部墓壇と、きわだった違いをみせる。



第6図 かしが谷2号墳外護列石実測図
(上記平面図、下記立面図)



第7図 かしが谷2号墳外周列石崩壊状況実測図



従って、地山整形も含めた墳丘の整形は、東側において丁寧であり、南側にその可能性がある。地形の關係から北側は可能性が少なく、西側では全く施されていない。よって、墳丘正面は東から南にかけての方向に求めることができる。

墳丘の規模については、高さ1.5m、短径12m、長径23mと推定できる。円墳と把握できるが、実際は正円でなく、著しい楕円を呈する。墳丘正面に配慮を払い、背面にあたる部分を犠牲にした結果であろう。なお、主体部と外護列石の關係から、径12mの余の円墳を計画していたとも考えられる。

最小限の労力によって、墳丘を巨大かつ壮麗に見せるための合理的な配慮と努力が、うかがえる墳丘である。

2 かしが谷2号墳主体部

かしが谷2号墳は、竪穴式石室と箱式石棺の二種類の埋葬施設をもつ。累下で、両者が併用された事例には寒川町奥3号墳・上庄町富丘頂上墳があげられよう。ただし、奥3号墳が前方後円墳である点、副葬品をもつ点、富丘頂上墳でも円墳ではあるが、副葬品の多い点、さらには両者が並列する点等に、本古墳との相違点を指摘できる。

主体部が設けられた墳頂部は、尾根にそってひろがりを見せるが幅は狭く、楕円もしくは卵型を呈する。従って、竪穴式石室と箱式石棺を並置するのが、不可能であったと考えられ、前者に後者をほぼ直交させて設置するようならざるを得なかったであろう。

両者の並置と各々の規模は、あらかじめ定まっていたと思われる。中心的埋葬施設の竪穴式石室が墳頂部中央を占めず東寄りに設けられていることから、明らかである。

なお、土層の観察から、箱式石棺は竪穴式石室築造後に設置されている。

(1) 竪穴式石室

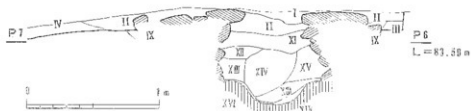
尾根筋に並行するように設けられた竪穴式石室の法量は次のとおりである。

全長3.1m、幅0.7~0.75m、高さ(最大値)0.85m。

竪穴式石室は、表土層が薄くついていたのみで、検出は容易であった。石室内埋土は、自然な堆積を示し、下層ほど露岩の風化によって生じた斜長方体の角礫を多く含んだ層が、観察できた。逆に上層ほど粒子の揃った砂質土である。

石室に使用された石材は安山岩の塊石であり、辺・角の部位が例外なく丸味を帯びている。幾分かの侵食作用を受けたためと思われ、同様な安山岩塊石は、北および南側の谷にみられる。古墳築造にあたって、石室等の用材として運びあげられたらしい。

用材の大きさは人頭大前後が一般的で、やや細長く扁平気味なものが選ばれている。石室壁



第6図 かしが谷2号球室穴式石室土層図

- I 赤褐色砂質土層 (腐蝕土混入)
- II 赤褐色砂質土層
- III 黄褐色砂質土層 (地山)
- IV 白黄色土層 (地山岩盤)
- IX 明黄褐色砂質土層
- XI 暗褐色粘質土層
- XII 明褐色粘質土層
- XIII 明褐色粘質土層 (砂粒子を多量に含)
- XIV 暗褐色砂礫土層 (角礫を多量に含)
- XV 赤褐色粘質土層 (角礫を含)
- XVI 灰褐色粘質土層 (粘土分を含)

体は、そのような石材を横に使いかつ、小口積みとする。控え積み用の石材は、小ぶりで、築体の背後にはほぼ一重につめこまれている。

石室壁は3～5段が現存し、やや持送り気味となる。石室解体のおり、用材間に粘土が残存している部分が多く確認できた。隙間に粘土をつめた可能性を指摘できる。

箱式石棺(天井石遺存)との関係から、石室の壁は現状よりかなり高くなることはあり得ない。そのことは、厚手の天井石が存在した可能性がないことも示している。調査によっても、天井石の用に足る石材は、石室内部も含め周辺には、検出できなかった。薄手の天井石が存在した可能性はあるが、その場合、人為的にかつ一挙に取り去られたと考えられる。当初から、木質の天井部だった可能性も否定できない。

石室のコーナは、上方では小口壁と側壁の両側に渡す石材が確認できるが、下方では直角をなすよう構築されている。高松市鶴尾神社4号墳、坂出市銚ヶ松古墳等、古式で大型の竪穴式石室と共通する構築法である。

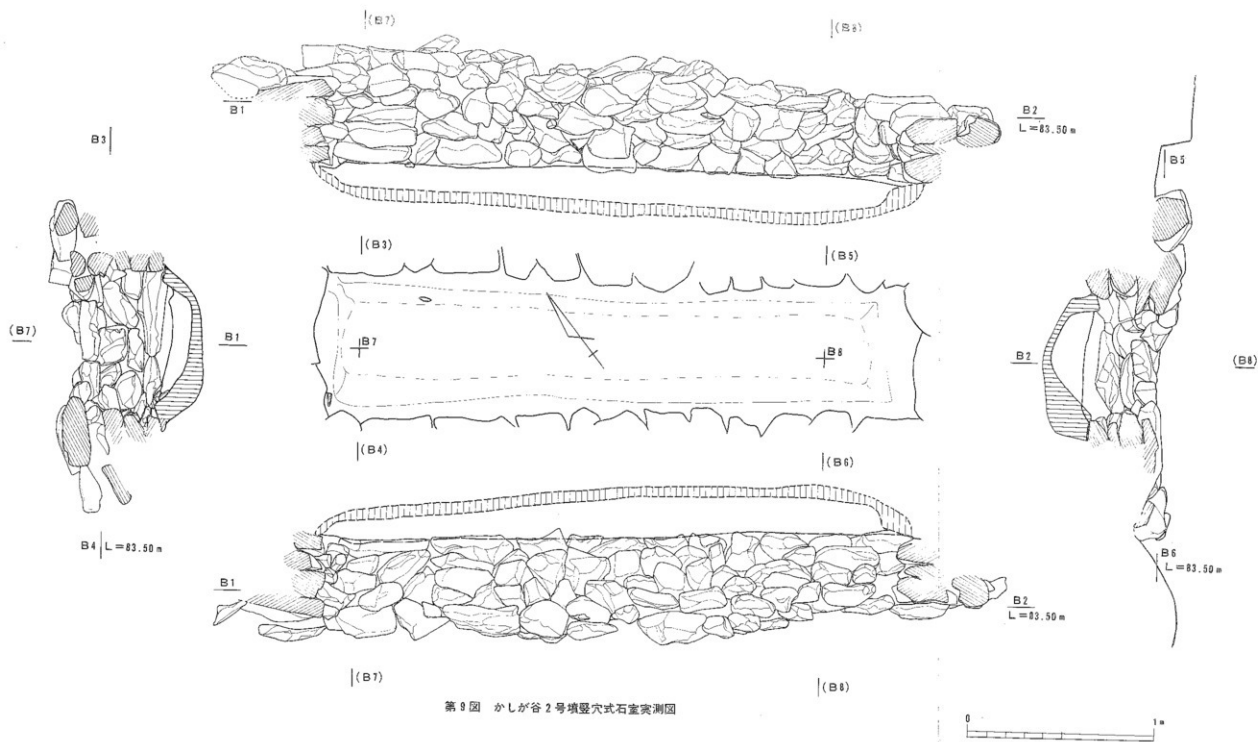
西小口壁基底石と、両側壁基底石の西側各々一石は、厳選されたものとみえ、各々の石材の小口部(壁面を構成する部分)が、長方形を呈するよう配慮されている。

ところで、石室基底石は後述する粘土床粘土の一部を敷く。その後に、竪穴式石室壁体が構築され、たとえられる。基底石を除去したところ、多くの用材の表面に、施朱が確認できた。朱の範囲は、いずれも部分的である。特に、西小口部の一石は、範囲もひろく朱色もあざやかであった。朱は、石材表面に塗布されたと考えるよりも、基底石踏えつけ直前に、塊状態の朱を置いたと思われる。柁安置直後、石室構築直前の葬送儀礼として注目したい。

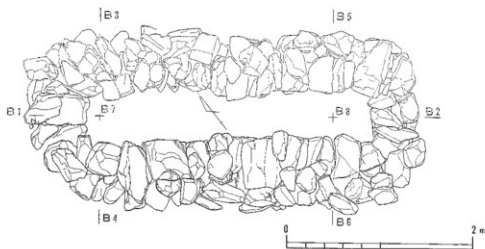
竪穴式石室内部には、断面U字型を見せる粘土床が検出できた。割竹式木棺の存在が想定できる。なお、粘土床の法量は次のとおりである。

全長2.93m、幅0.53～0.66m、深さ0.08～0.15m。

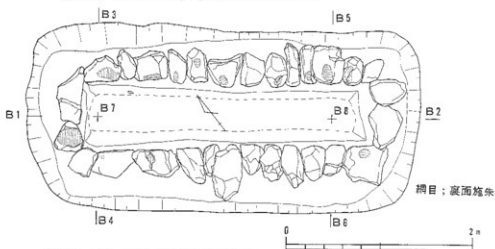
石室および粘土床は、尾根基部の方向が高くかつ幅広く造られており、先述の基底石のあり



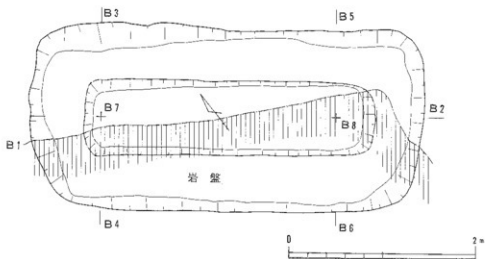
第9図 かしが谷2号墳竪穴式石室実測図



第10図 かが谷2号墳壙穴式石室上面実測図



第11図 かが谷2号墳壙穴式石室基底石実測図



第12図 かが谷2号墳壙穴式石室墓壇実測図

方、朱の状態等から、頭部と断定できる。

粘土床を形成する粘土は、腐れ跡を含み明黄色を呈しきわめて堅固であった。明らかに號より運搬されたものである。なお、箱式石棺を覆った粘土と共通するが、腐れ跡の遺はやや少ない。粘土床は部分的に朱が確認できた。木棺施朱の名残りであろう。

竅穴式石室の墓壇は地山を穿つ。特に兩側は、風化直前ながら露岩を掘削している。墓壇底部の中央には、さらに短冊形の浅い墓壇が穿たれ、全体として二段を呈す。各々の墓壇の規模は、次のとおりである。

一段目

長さ4.2m、幅2.2m、深さ(最大値)0.4m

二段目

長さ3.1m、幅0.8m、深さ(最大値)0.22m

二段目の墓壇は、木棺を安定させるためのもので、粘土床で覆い尽くされている。なお、粘土床の中央部は薄く粘土が敷かれるのに対し、縁辺(二段目掘り方の)は、相対的に粘土が部厚く、両側壁基底石との間に幅5cm余の平坦な帯状の部分が観察できる。頭部あるいは足部にあたる小口壁部分にも帯状の平坦面がみられるが、側壁部のそれより一段低く形造られている。

なお、石室の構築は次のとおりと推定できる。

第一段目墓壇 掘削

第二段目墓壇 掘削

第二段目墓壇に粘土敷設

割竹式木棺安置

朱を使用した葬送儀礼

基底石掘置

粘土床調整

石室構築

天井石懸架(?)

さらに、竅穴式石室の位置から今岡古墳の墳丘全体を望見できる。箱式石棺の位置では、途中の尾根にさえぎられ、前方部先端が視界から隠れる。偶然であろうか、興味ある事実である。

(2) 箱式石棺

竪穴式石室に直交させて設置されたのが、第2主体の箱式石棺で主軸は南北にとり、法量は下記のとおりである。

全長1.9m、幅0.35～0.38m、高さ0.3m

用材は竪穴式石室・外護列石のそれと違って、板状安山岩が使われている。産地の推定は不可能であるが、距離を運ばれた石材といえよう。

石棺は、明黄褐色粘土によって被覆されていた。断面が整美な弧状を呈す被覆層は、一部を除き、ほとんどの用材を包み込む。なお、用材相互の間隙には、粘土はみられない。

両端には、盗掘痕がみられる。ただし、石棺内部には攪乱を受けた痕跡はなく、盗掘時は空間を保っていたと思われる。盗掘後、急速に埋没したのであろう。盗掘現場周囲では、粘土被覆は破壊され、周囲には粘土が微量に混入された土がひろがっていた。

蓋石は遺存部分で確認する限り、2段から3段、部分的には4段に懸架されている。そのうち、棺身を直接覆う最下段は方形に近く形も比較的揃った板状安山岩が、使用されている。現在3石が遺存するが、両端の各々1石は除かれており、最下段蓋石は「5石」と推定できる。

最下段石材設置後、三角形もしくは長方形に近い石材が、側壁線上に石材の長辺を揃え、側壁と蓋石との間隙をふさぐように置かれている。2段目蓋石を配石後並べたものも1～2点みられる。

最下段蓋石を覆う2段目蓋石は、長方形に近い石材が並べられている。石材は部分的に重複しており、遺存部分で確認する限り、南側から北側へと順次懸架されたと解釈できよう。さらにその上にも蓋石が置かれるが、ランダムに積んだものである。

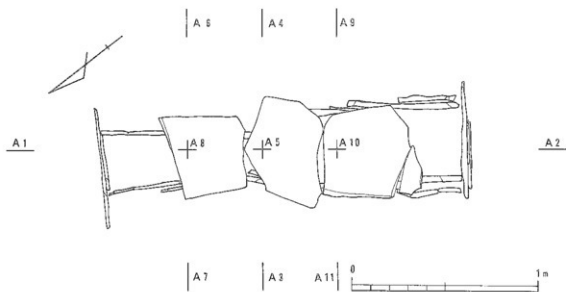
棺身は、小口部2石、側石3石・4石の計9石で、形造られる。後述する人骨のあり方から、南側が頭部と断定できる。

両小口壁は各々1枚の石材を最初に立てる。このとき箱式石棺の全長が定まる。墓壇は小口部分では石材に合わせよう両側に数cmづつ角状に拡張して掘削され、小口石材の安定をはかる。さらに、頭部では外側、足部では内側に、小さな石材を小口壁とは間隙のないようにあてる。目的は不明であるが、足部のそれは石棺幅の最小値を決定している。

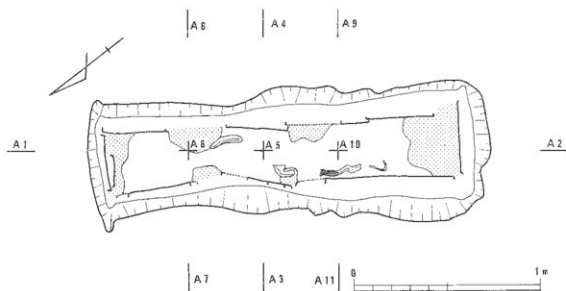
側壁は、西側が3石、東側が4石である。特に頭部側石材は大形かつ厚手のものが使用されていて、安定感をうける。側壁中央にあたる石材は、内側に倒れかかるように検出された。頭部・足部側壁石材の内側に組まれたためである。側壁の各石材上端レベルは、小口部分も含めて、揃うように配慮されている。しかし、組み合せ部分基部は、隙間が生じている。この部分には外側から小ぶりの板状安山岩があてられ、隙間をふさぐよう工夫される。特に、頭部側は側壁に使用された石材と同じ厚手の石材が用いられており、あたかも櫛のようにみられる。こ

のような石材は、側壁の裏込めの役割をも果たしている。さらに、石材と墓床壁の間隙には石棺全体を被覆した粘土をつめ、倒壊、裏込めの両石材の固定をはかる。

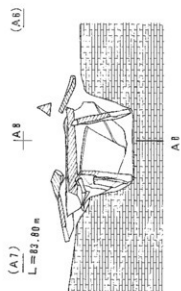
石棺内には、特別な配座は弘われていない。墓床底は露岩であり、そのまま棺底とすることはあり得ない。棺内に薄く検出できた黄褐色砂質土層が、当初から敷かれていたと思われる。



第13図 かしが谷2号墳箱式石棺最下段蓋石実測図



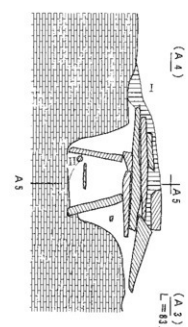
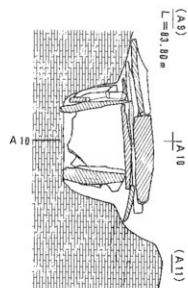
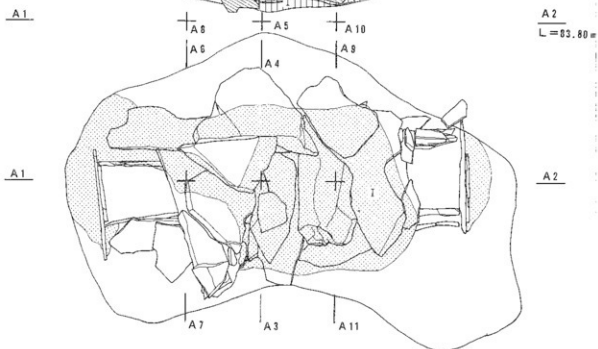
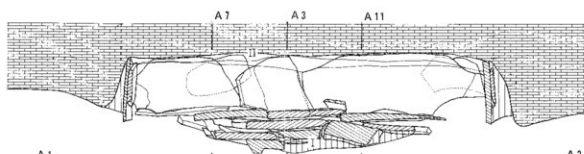
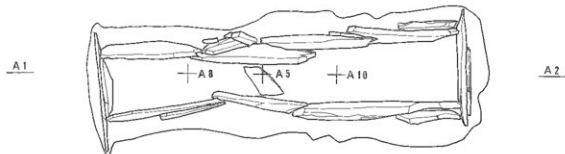
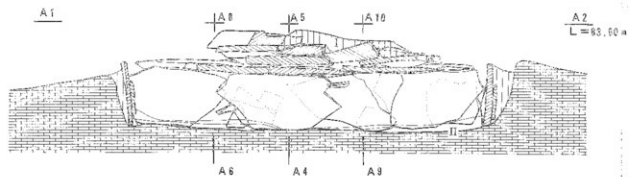
第14図 かしが谷2号墳箱式石棺内・墓床実測図



I 明褐色粘土層
II 黄褐色砂質土層



第15圖 かしが谷2号墳箱式石棺突剝面



(A3)
L=81.00m

基部隙間から流出した少量の粘土が、黄褐色砂質土層上に堆積していた事実は、この推定の正確さを保障する。

箱式石棺内には、人骨が部分的に遺存していた。南から北に順次、下顎部分、骨板と思われる部分、大腿骨部分が検出できた。

墓壇は、地山を穿つが、そのほとんどは竪穴式石室でも確認できた同様に、風化直前の母岩を掘削している。規模は箱式石棺の法量をひとまわり大きくしたのみで、小口部分を除き必要最小限に押えられている。

3 遺物

かしが谷2号墳から得た遺物は、箱式石棺の人骨片のみである。

2号墳の両主体では、副葬品が検出できなかった。当初から副葬することは無かったのか、盗掘等の結果かは不明である。

また、墳丘全域はもちろん外護列石の崩壊した石材間より、埴輪の一片すらも確認できなかった。埴輪樹立の可能性はないといえよう。

IV かしが谷3号墳

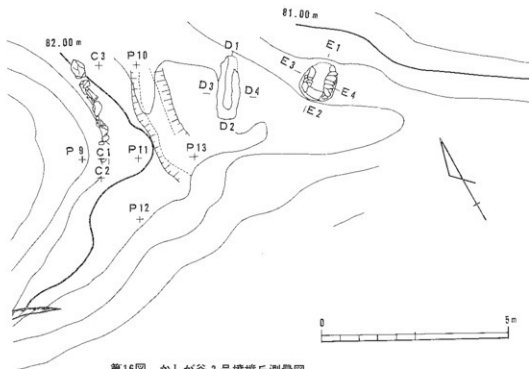
1 かしが谷3号墳墳丘

本古墳は、小型竪穴式石室と粘土床を主体部とする古墳で、2号墳の東側に隣接して検出できた。当初、両主体部が確認された時点では、2号墳の墳丘外埋葬帯と考えていたが、2号墳外護列石の崩落した石材を除去後、粘土床の西側を走る浅い周溝が検出できたので、古墳と判断し、かしが谷3号墳とした。

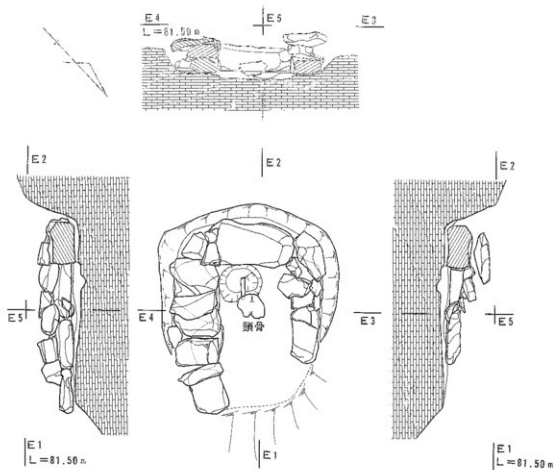
3号墳は尾根後線上に墳丘の中心を置かず、やや北側による。付近は後縁が若干屈折する付近で、僅かながら横に突き出した瘤状地形を利用して築造した古墳といえる。墳丘のかなりの部分が流出した要因であろう。

盛土については、流出が考えられ全く遺存していない。主体部は、ほぼ地山面で確認されている。後述する主体部のあり方から、少しばかりの盛土が存在したらしい。

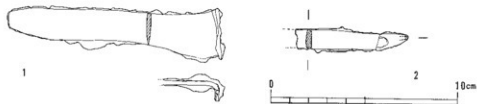
周溝は、断面がレンズ状を呈し、幅0.95～1m、深さ（検出面からの数値、最大値）0.15mで、検出できた全長は2.7mをはかる。周溝は粘土床の南西から北西にかけて走る。全体として、外側にややふくらみをもつ。3号墳を円墳と推定する根拠である。



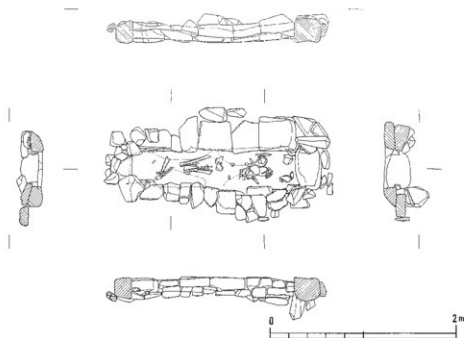
第16図 かしが谷3号墳墳丘測量図



第17図 かしが谷3号墳小型竪穴式石室実測図



第18図 かしが谷3号墳出土遺物実測図 (1鉄鍔 2. 鉄器片)



第19図 久米池南遺跡小型竪穴式石室（2号）実測図

2号墳外護列石構築の為生じたフラットな地山面に周溝を、切り込んでいる。周溝内には、外護列石に使用された安山岩塊石が、底部の茶褐色土層中に3個検出されたのみである。2号墳外護列石の急激な崩壊前には、既に埋没していたと考えられる。ただし、短期間は周溝としての機能を果たしたと思われる。

これらより、3号墳は2号墳より後に築造され、2号墳の外装が崩壊するより前には、古墳としての機能を消失していたらしい。

現存する周溝は墳丘の西側にあたる。北側は急斜面のため、最初から設けられなかったであろう。南と東側はともに流出したと考えられる。従って、墳丘規模の数値は示せない。ただし、小型竪穴式石室と粘土床の中央周辺に、墳丘の中心があると仮定すれば、直径6m余の円墳と推定できよう。

2 かしが谷3号墳主体部

主体部は、小型竪穴式石室と粘土床の各1ヶ所、計2ヶ所以上である。以上としたのは、既に流出した埋葬施設が存在した可能性があるからである。

2ヶ所の主体部は尾根稜線より北側に各々位置する。主軸は、各々ランダムな方位をとる。

(1) 小型竪穴式石室

かしが谷3号墳の中心主体とされる埋葬施設である。既に土砂流出によって下半が失われ、全体の復元はむずかしい。

高松市久米池南遺跡の第2号小型竪穴式石室と法量・構造とも酷似しており注目できる。その事例を参考にすれば、下半が流出した小型竪穴式石室の全長は1.5m前後と推定できよう。この場合1/2近くが流出したと考えられ、墳丘全体で考えるとかなりの部分が失われたと想定できる。

なお、小型竪穴式石室の法量は次のとおりである。

全長1.5m前後（推定）・幅0.4m・高さ0.2m

残存する南側小口部には、大型の方柱状の石材を置き、その一面を小口壁として利用する。側壁には、小さめの石材を2段に積む。これらの石材は、2号墳竪穴式石室と同質な安山岩で、両側の谷川からの供給が考えられる。

地山を穿つ墓壇は、石室全体を設置するに必要な程度の幅を有するに過ぎず、控え積みはみられない。

頭骨の下半が残されていた。さらに頭部付近の床面には、直径19cm、深さ6cmの楕円形の小穴が穿たれていた。鉄鎌が基部を小穴の底部に接し、切先を穴縁にかけるようにして無雑作に置かれていた。頭骨との関係から、遺体安置直前に副葬されたことは明白である。

天井石は検出されていないが、流出が顕著なこと、久米池南遺跡の事例では天井石を有することを考慮すれば、存在した可能性が高い。

このような、小型竪穴式石室は、規模・構造の点でも一般的な竪穴式石室と著しい相違点を有し、見劣りはまぬがれない。小口部を一個の石材であてる点は、箱式石棺の手法である。

(2) 粘土床

かしが谷3号墳の第2主体で、検出された周溝東隣に位置する。

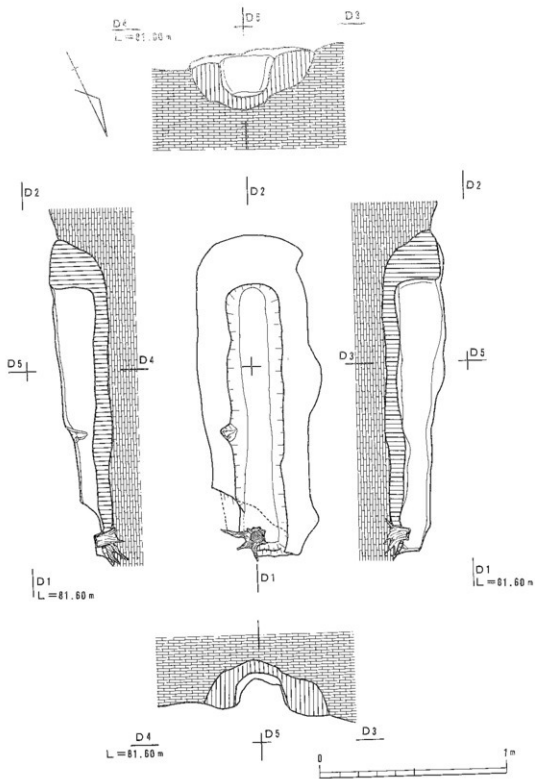
本来は木棺全体を粘土で被覆する粘土槨の上部が流出したと考えられる。

木棺痕跡の北端は、流出と樹根により微妙ではあるが、現存粘土床北端付近と一致すると推定できる。従って、棺の規模は次のとおりである。棺痕跡の横断面は深いU字型を呈すところから、割竹式木棺かそれに近い形式の棺が考えられよう。

長さ1.43m、幅0.3m、高さ0.25m以上

規模はかなり小さく、被葬者は女性もしくは小児とするのが妥当であろう。

墓壇は、他の主体部同様地山を掘り込む。幅0.65mを測る墓壇横断面は船底を呈するが、木棺?の置かれる中央あたりは、心もち掘り下げられている。墓壇内には暗黄褐色粘土が充満さ



第20図 かしが谷3号墳粘土床実測図

れている。2号墳箱式石棺に使用された粘土と比べ、腐れ炭を多めに包含するようである。なお、粘土内より鉄器を抽出できた。

3 遺物

かしが谷3号墳では、小型竅穴式石室出土の頭骨片と鉄鎌、粘土床出土の鉄器片を各々得ることができた。主体部が部分的に流出していることを考慮すれば、先述以外にも副葬品があった可能性はあるが、確率は低いであろう。埴輪の樹立の可能性も同様である。

(1) 鉄鎌

基部をおりまげた、直刃鎌と、考えられる。保存状態はきわめて良好で、厚さ0.3cm、全長11.2cmをはかる。幅は先端が最小で0.8cm、基部で2.7cmとそれを結ぶ刃部は緩やかな曲線を描く。それは何度となく繰りかえされた磨ぎの結果であろうか。長期間の実用が想定できる。

基部の磨ぎが施されていない部分から、着装部從0.7cm余の柄を復元できる。また、刃部に對して基部着柄部は心もち屈曲する。このため、刃部と柄は、鈍角を呈す。

また、先端付近に木質の痕跡が認められるが、原因等は不明である。

(2) 鉄器

小型の鉄器で、先端を折る等、保存状況は良好とはいえない。全長6cm、幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る。断面は楔形および長方形を呈する。

(3) 頭骨片

箱式石棺出土の人骨も含めて、今後の調査にまちたい。

V かしが谷古墳群

今回の調査対象外ではあったが、かしが谷古墳群を形成する4基のうち残り2基を概述しておこう。

1 かしが谷1号墳

2号墳の西に連続して立地する。確証はないが2号同様、瘤状地を使用して築いた古墳と推定される。

2号墳との鞍部の地形を整形と考えられる以外、他には顕著な痕跡は見い出せない。墳丘の未整形は、2号墳での特徴でもある。

墳丘中央部には、2号墳と同じ位の墳頂部平坦面がみられる。中央には2号墳竪穴式石室の用材と同じ安山岩塊石がみられる。

墳丘規模は、長径17m、短径9m、高さ2mと、2号墳よりやや小型になると推定できよう。

2 かしが谷4号墳

詳細な位置は不明であるが、2号墳の東南の果樹園の中に所在した。

1・2・3号墳が尾根稜線上に連続して築造されたのに対し、近辺の横穴式石室墳と同様、南むきの斜面に立地する。

土地所有者によれば、開墾時に発見されたという。大きめの石材をし字状に並べた列石がみられ、その内側から須恵器平瓶が何点か出土した。それらの証言と、保管されている平瓶1点から、横穴式石室の存在と、7世紀中頃の築造の時期が導き出せる。

基底部あるいは、床面は埋戻していると思われるので、調査によって詳細は明らかにされるであろう。

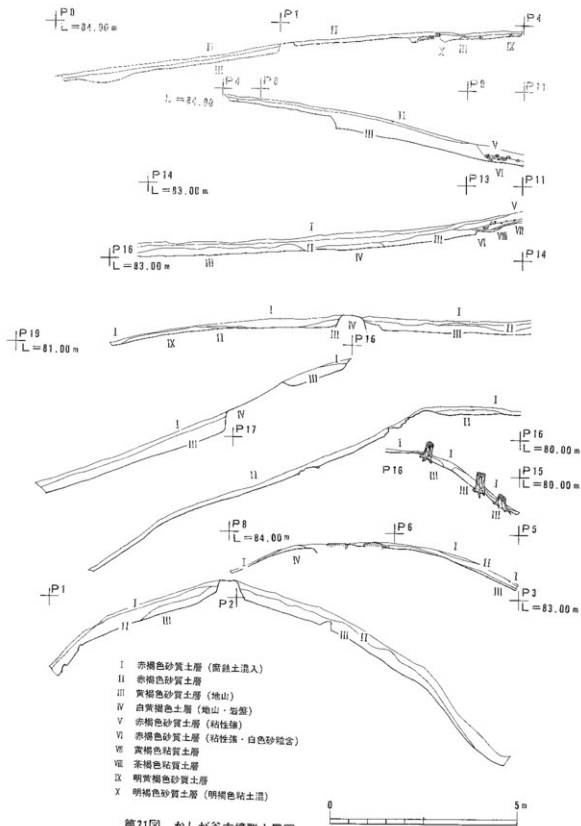
3 その他

かしが谷古墳群周辺では、古墳の他、尾根先端の箇所が注目される。

調査の初期、3号墳の番号をふっていた。尾根先端部分のため、周囲の眺望は最高で、高松平野東部の本津川流域、麓の是竹から佐料の家並みをも隅々まで見渡せる絶好の地点である。

発掘調査では、何等埋葬施設が確認されず積極的な証拠に欠けるため、本報告では古墳と考えないこととし、3号墳の名は、2号墳の東側に発見された古墳に譲った。

しかし、かしが谷1・2号墳の墳丘が、地山整形が一部にしか及ばないこと。特に3号墳では墳丘が著しく流出していることから、盛土を有し地山迄墓壇掘り方の及ばない埋葬施設を持った古墳が、存在した可能性は否定できない。



Ⅷ かしが谷古墳群について

かしが谷2号墳・3号墳のうち、前者は堅穴式石室と箱式石棺、後者は小型堅穴式石室と粘土土床を主体部にもつ円墳である。しかし、都合4ヶ所の主体部からは3号墳で鉄鎌と鉄器片が出土したのみで、遺物は決定的に少ない。以下は、そのような条件下に考察を試みた。資料の任意性等に疑問がない訳ではないが、御容赦いただくとともに御批判・御叱正をいただければ幸甚である。

かしが谷2号墳と3号墳の関係は、既述したように外護列石と周溝の「構築」「掘削」「埋没」「崩壊」への移行過程から、前者が先行して築造されたことは明白である。なお、両者の築造時期は極端にかけ離れない。

かしが谷3号墳出土の鉄鎌は、直刃鎌である。直刃から曲刃への移行期は、中期初頭といわれる。従って、3号墳への副葬時期（築造時期）を中期以前と考えておきたい。

別表^⑤の円墳・方墳のうち、前期前半に属する古墳には、円養寺A地区・谷田の2例があげられる。前者は、同C・D地区とともに弥生時代終末から古墳時代初頭の墳墓とされ、後者からは平底の埴が出土しており、早い時期の古墳と考えられる。これに対し、50基余の別表中、29基と過半数以上が、中期から後期初頭にかけた古墳である。時期未詳とした古墳にも、中期に属すると思われるのも多く^⑥、前期古墳には後半とされるものが多数を占める^⑦。

従って、前期後半に円墳の築造が各所に始まり、中期に至って築造数が飛躍的に増加する傾向を指摘できる。誤岐は、前方後円墳の密集地帯として知られるが^⑧、それらは前期に属する例が多く、中期の前方後円墳は数で劣る^⑨。円墳の増加から盛行への動きと軌を一にした、盛行から減少への流れが想定できる。前方後円墳を築造した首長層が、制約を受けたため、円墳へと転化したためか、彼等を牽制するように出現した新たな首長層の墳墓が、後日を待ちたい。

発掘調査で得た事象から、かしが谷2号墳を、円養寺A地区・谷田古墳と同様、前期初頭から前半の築造と推定することは不可能である。前期後半から中期にかけての、円墳の増加から盛行という流れに沿って出現したと考えられる。従って、かしが谷2号墳は、前期後半以降の築造と推定できよう。

箱式石棺は、縄文時代から出現した埋葬施設ではあるが、古墳時代に至っては墳丘を有しない墳墓に取り入れられる傾向がある。しかし、別表にみるように、円墳・方墳の主体部に箱式石棺が採用される事例も決して少なくはない。別表によれば、最も古い事例に、弘法寺^⑩、富丘頂上墳等の古墳があげられる。さらに、前期前半の前方後円墳で後円部に箱式石棺を配する事例は比較的少なく、確実な事例では奥3号墳第2主体のみである。

前段に述べた前期後半からの円墳等の増加・盛行の現象は、より簡易な埋葬方法である箱式石棺の採用例の増加と、表裏一体として扱われよう。かしが谷3号墳箱式石棺の設置要因もそこに求められよう。ただし、大井石を二重三重に懸架する等、丁寧な構造で奥3号墳例に近似する。古墳に採用された箱式石棺としては、古墳に属するか。

かしが谷2号墳の第1主体である竪穴式石室は、すべり山2号墳第1主体、石清尾山切通し上の石塚の主体部に類似例が見い出せる。全長3m前後の規模や持送り構造をもつ竪穴式石室で、前期前半に類似の多い長大な竪穴式石室の小型化と考えられる。すべり山2号墳、石清尾山切通し上の石塚はともに横石塚古墳である。讃岐での横石塚古墳の終焉を中期に求めるとしても尚者に、中期初頭より遅れる年代観は与えられないであろう。特に前者は、前期古墳との評価が与えられており、むしろ、かしが谷2号墳第1主体部のような小型化した竪穴式石室を、前期後半遅くとも中期初頭と考えるのが妥当と思われる。

竪穴式石室で、一個の大型石材をたて、小口壁とする構造を持つ例を、幾つか指摘できる。箱式石棺の手法の影響がみられ、竪穴式石室構築の簡素化あるいは合理化と考えられる。前期後半から末の築造と考えられる鉢伏山1号墳・2号墳、鹿隈カンス塚第2主体等の他、石船塚古墳第2主体が、その初現例である。最も新しい事例としては、中期末から後期初頭の末剛古墳があげられる。

かしが谷3号墳の小型竪穴式石室は、久米池南遺跡の類似とともに、そのような竪穴式石室の遺形と考えられる可能性¹⁰⁾もあるが、小型化・粗雑化として把握しておく。従って、かしが谷3号墳築造を、前期末から後期初頭の範囲と推定できる。

主体部の基数について別表で検討すれば、円養寺A地区・谷田の早い時期の古墳は、主体部が1ヶ所である。ところが、前期後半では、2ヶ所と複数化した事例が多い。さらに、中期後半の古墳では主体部が単独で墳丘中央付近に設置される、傾向が認められる。川上、女木丸山、岡の御堂1号墳・2号墳、浦山3号墳・4号墳、末剛、津頭西の各古墳が、その具体例である。大井七ツ塚4号墳の下部遺構も、類例としてあげられよう。僅かに、権八原B地区2号墳が例外に過ぎない。

小首長が急速に伸長するとともに、最近親者の墳丘内埋葬を避ける社会的制限が成立したためか、両者が互いに独立した墳丘を持ったためか、検討を要する。

かしが谷2号墳・3号墳の主体部はともに2ヶ所を設ける。従って、前期後半以降、中期前半以前の年代観を与えることができる。

別表中古墳の、グラフによると、20m・70mに各々ピークを認められる。20mのピークは中期古墳のみであり、70mのピークは前期古墳のみで、各々構成される。かなりの比高差をもつ中期古墳も偶発的に存在するので、断定は不可能であるが、比高差70m余のかしが谷2号墳・

3号墳は、かなりの確率で「前期古墳である。」との主張が、許されよう。

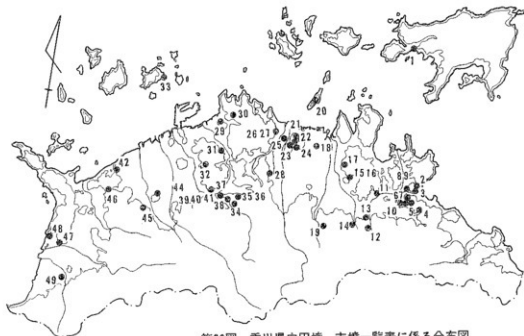
かしが谷2号墳と、その南々東65mに位置する前方後円墳今岡古墳は、全貌を互いに視察できる。前者は、墳丘の整形から、東もしくは南に面した古墳といえる。後者は、墳丘が地塁緩縁線より北側に寄せて築かれている。南側に余笹を持たしたか、北側にせり出さしたかは、にはわかに判じがたい。後段とすれば、両古墳には相互関係を想定できると同時に、佐料地区を意識した古墳と判断できよう。佐料地区からは、弥生時代後期から末期と奈良時代の土器片が採集され、両古墳と同時期の集落の存在も否定できない。両古墳ともに、佐料地区と強い関係をもつのであろう。

次に、両古墳の関係については、共存関係と、連続的關係（一時的な不連続期間が存在する可能性も含めて）が、想定できるが、ともに佐料地区を母体とする首長墓との見方が許されるならば後者が正しいであろう。

今岡古墳の年代については異説が多いが、中期古墳とする点では一致する。さらに、先述の幾つかの考察を尊重するならば、かしが谷2号墳を今岡古墳より先行して築造された可能性が強い。かしが谷2号墳・3号墳に埴輪片すら検出されなかったのに対し、今岡古墳には形象・円筒の各種埴輪が倒立されている。埴輪がこの地域に持ち込まれる以前と以後の姿であろうか。

以上、数々の考察を加えてきたが、かしが谷2号墳・3号墳の年代観について、決定的な根拠は得られなかった。が、前期後半から中期前半、さらにしぼり込めば前期末、降っても中期初頭の区間と推定される。

ところで、かしが谷2号墳と今岡古墳のように、1km未満の距離内に所在し、円墳から前方



第22図 香川県内円墳、方墳一覧表に係る分布図

後円墳に変化するモデルは、2ヶ所において成立する可能性がある。津田町の龍王山古墳から岩崎山4号墳、高松市東部の北山古墳と高松市茶臼山古墳（各前記古墳が円墳）の2グループである。いずれも、畿内の影響が濃厚な地域で、特に後者は、前方後円墳高松市茶臼山古墳の築造に、畿内勢力の係わりが指摘されている。

今岡古墳の前方部から出土した空心長持型陶棺を、畿内の長持型石棺の類例と考えると、ここ先無地区も畿内の影響の濃厚な地域といえよう。地域の小首長の本来の姿が、かしが谷古墳群の被葬者ならば、今岡古墳は彼等が外的要因で成長した姿であろう。それは、突然変異的でさえあった。

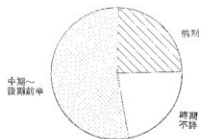
注

- 1 別表は、県内に所在する円墳・方墳のうち、横穴式石室を主体部に採用しない古墳の集成である。主に文献によったが、未報告の発掘調査例も多く、概述のものも少なかった。標本数は49基で、統計的に有効であるか否か問題がある。また、標本分布の一様性、標本選択の任意性等に問題点がある可能性がくはない。
- 2 例えば、石清尾山23号墳、石清尾山掘鉢谷、白山神社、本苑寺北1号墳等
- 3 例えば、弘法寺、宮丘上墳等
- 4 玉城一枝、「讃岐の前方後円墳・香川史学8」香川歴史学会1979によれば、92基。ただし、かしが谷古墳が前方後円墳でなく円墳であったように若干の変化はある。
- 5 縄文中期の前方後円墳としては、大川町富田茶臼山古墳、高松市三谷石船古墳、善通寺市域の数基、観音寺市・青塚古墳等があげられよう。
- 6 加工が施された箱式石棺は、弘法寺古墳と北地古墳があげられる。ともに、割抜式石棺の用材産地、鷺ノ山、火山に近く、特に後者は火山の麓で凝灰岩の使用が知られている。従って、割抜式石棺製作技術が箱式石棺に採用された可能性の検討を要する。
- 7 奥3号墳例は特異と考えられる。ただし、岡古墳を発生期の古墳とするには、渡部明夫・玉城一枝の間氏が、それぞれ「龍王山古墳調査概報」「讃岐の前方後円墳」で、竪穴式石室の形状に再検討の必要を提起されておられる。
- 8 久米池南遺跡では、小型竪穴式石室と共存して墳墓群を形成すると考えられる箱式石棺のほとんどが、弥生時代中期末の高地性集落遺構と重複する。遺構の崩壊過程に問題はあるが、長時間を想定する必要はないと思われる。従って、箱式石棺群を別時期の所産と考えない限り、小型竪穴式石室の時間はさかのぼる。
- 9 龍王山・岩崎山4号墳を含む津田湾沿岸の古墳は畿内の影響を受けた墳墓群とされてきた。高松市茶臼山古墳については、楕形石一對の出土や、長大な竪穴式石室が、それを物語っている。

香川県内、円墳・方墳一覽表 I

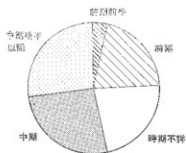
順	名 称	所在地	地形	標高	比高	墳形	直径 墳頂径(m)	径丘高さ	施設	備 考
1	栗 丘 原 古	(内)高松町西子浦	丘陵頂部	66	70	円	14			
2	龜 上 山	(内)津田町中島立	丘陵先端	71	65	円	23~27.8	2.5	葺石	円墳・方墳
3	岩 崎 山 1 号	(内)津田町南割立	丘陵頂部	60	55	円	15			
4	北 地	(内)大川町北地	尾根最下端			円				
5	黒 岩	(内)大川町宮地	尾根頂部	140	110	円	6	0.3~0.4		
6	奥 2 号	(内)藤川町奥	丘陵頂部	115	70	円	15	2		
7	吉 枝 1 4 号	(内)藤川町奥	尾根	75	40	円	10	1.5		
8	寺 尾 2 号	(内)藤川町神前寺尾	尾根頂部	60	45	円	19			
9	寺 尾 4 号	(内)藤川町神前寺尾	小丘陵上	60	45	円	5	1.5		
10	大井七ツ塚 4 号	(内)大川町栗田西古枝大井	低丘陵	30	16	円	22	2.9		4.55x1.45x1.5
11	西 山 用	(内)長尾町西山用	丘陵頂部			円	9	1.5		
12	大 石 神 社	(内)長尾町大石	丘陵	100	20	円				
13	川 上	(内)長尾町川上和字中代	丘陵上	60	5	円	22	3		円筒
14	西 土 居 2 号	(内)三木町井戸	尾根後縁	72	10	円	10	~1.9	崩落	
15	藤八原 A 地区 7 号	(内)三木町池戸	丘陵			円	10	1.4~1.5	崩落	
16	藤八原 B 地区 2 号	(内)三木町池戸	丘陵			方	12		崩落	
17	北 山	(内)新田町久本	尾根後縁	75	70	円	12~14	1.5	崩落	
18	白 山 神 社	(内)本太町	平地	2	0	円	25~	3		
19	門 黄 寺 A 地区	(内)西根田町門黄寺		90	30	円	30?	1.5?	崩落	
20	女 木 丸 山	(内)女木町202	尾根鞍部	90	90	円	14.5~16	1.2~1.8		
21	石 清 尾 山 2 3 号	(内)宮脇町二丁目	斜面	60	55	円				横石塚 縦石塚
22	石 清 尾 山 掃帚谷	(内)藤山町	斜面	-	-	円				横石塚 縦石塚
23	石 清 尾 山 切通し	(内)西春日町切通	尾根後縁	-	-	円	15?	1.2~1.5		横石塚 縦石塚
24	駒 尾 神 社 5 号	(内)西春日町	尾根後縁	-	-	円	6~8	1.5		横石塚
25	祖 作 牛 塚	(内)飯沼町祖作	平地	0	0	円	14	1~		人物・家・円筒
26	かしが谷 2 号	(内)鬼無町是竹	尾根後縁	80	70	円	12~23	1.5	外護列石	
27	かしが谷 3 号	(内)鬼無町是竹	尾根後縁	80	70	円	6		崩落	
28	本 壳 寺	(内)西山崎町				円				
29	藤 山 1 号	(内)林田町ほか	山頂	164	160	方	10×10.1	1.3	横石塚	
30	ナベリ山 2 号	(内)青島町	尾根後縁	160	155	方	11.5×12.5	~3	横石塚	
31	弘 法 寺	(内)前中町城山	尾根先端	60	50	円	10	0.6		
32	向 山	(内)川津町西田向山	丘陵頂上	94	70	円	10			
33	龜 山	(内)本島町字甲生浦	島部碑頂部	21	20	円				
34	末 田	(内)綾上町山山下末田	低丘陵	77	20	円	24.6	3.3	葺石	円筒
35	洞 の 御 堂 1 号	(内)綾南町洞宮岡の御堂	丘陵頂部	60	20	円	13	2	崩落	円筒・銅部
36	洞 の 御 堂 2 号	(内)綾南町洞宮岡の御堂	丘陵頂部	60	20	円	11~12	1.3	崩落	円筒
37	津 頭 東	(内)綾南町大字小野字津頭	台地縁	50	10	円	35?	1.3	葺石	円筒
38	津 頭 西	(内)綾南町大字小野字津頭	台地縁	50	10	円	7			

№	器 種 部 名	金 目	概 寸	高 寸	主 法 部 特 色	産 地	備 考	時 代	主 要 文 献
1	甌穴式石室	4	—	1	木造、造形多し	群馬県利根郡1、草津2、碓氷2、碓氷2、群馬県利根郡1、碓氷郡利根町1、碓氷1、碓氷1、平谷町等碓氷1、碓氷1	富丘古墳群の甌穴	前期後半～中期前半	群馬県史記(群馬県史記)1
2	箱式石棺	2	0.5	0.5	造形多し、扉付埋蓋あり			前期前半	藤山古墳群発掘報告
3	甌穴式石室	5.9	0.75~0.3	0.8	墳丘中央に位置せず	群馬県内(花文塚1、鉄塚1、武刀1、藤1、鉄塚2)	藤山古墳群	前期後半	群馬県史記(群馬県史記)5
4	箱式石棺	1.45	0.55~0.57	?		大刀1、鉄塚1、石塚1、石塚1、月島具形林2	前方後円墳1号墳と同一群	前期後半	文化財協会誌 特別号6
5	箱式石棺	1.26	0.45~0.51	?		大刀1、刺1、小塚1	奥古墳群の一	特殊～中期	藤山町誌
6	箱式石棺	1.29	0.63	0.38	扉付加工組合せ			中期	文化財協会誌 特別号6
7	箱式石棺	1.85	0.35	0.2	扉付加工組合せ			中期	文化財協会誌 特別号6
8	箱式石棺	2.55	0.3	—	扉付加工組合せ			前期後半	文化財協会誌 特別号6
9	箱式石棺	2	0.6	0.4				特殊～中期	藤山町誌
10	箱式石棺	2	0.6	0.3				中期	藤山町誌
11	甌穴式石室	2.5	0.7	0.5				中期	藤山町誌
12	甌穴式石室	2.7	0.4~0.6	0.35				中期	藤山町誌
13	甌穴式石室	2.5	0.4~0.45	0.4~	上部遺構、上部遺構あり			中期	藤山町誌
14	甌穴式石室	2.2	0.45	0.4	上部遺構、墳丘中央			中期	藤山町誌
15	甌穴式石室	2	0.5	0.4	上部遺構			中期	藤山町誌
16	甌穴式石室	2.5	0.7	0.7	下部遺構、墳丘中央			中期	藤山町誌
17	甌穴式石室	2.2	1	0.8	扉付加工組合せ			中期	藤山町誌
18	甌穴式石室	4.5	0~0.78	0.8	平面的に広い			中期	藤山町誌
19	甌穴式石室	3.07	0.61~0.72	0.74	上方が傾く、墳丘中央			中期	藤山町誌
20	箱式石棺	~2.6	0.53~0.63	0.3	墳丘中央			中期	藤山町誌
21	甌穴式石室	2.3	0.55~0.6	0.38	(遺構位置量)、墳丘中央			中期	藤山町誌
22	箱式石棺	2.6	0.5	—				中期	藤山町誌
23	箱式石棺	1.95	0.45	—				中期	藤山町誌
24	箱式石棺	2.9	0.9	0.2	(木製遺構)、埋蓋あり			中期	藤山町誌
25	箱式石棺	2.5	0.9	0.2	(木製遺構)、埋蓋あり			中期	藤山町誌
26	甌穴式石室	1.5?	0.4	0.33	箱式石棺の手法、埋蓋あり			中期	藤山町誌
27	甌穴式石室	2.7	1.3	—				中期	藤山町誌
28	甌穴式石室	2.81	0.44~0.52	0.38	墳丘中央			中期	藤山町誌
29	甌穴式石室	1.78	0.36~0.45	0.3	甌穴式石室の手法を採用			中期	藤山町誌
30	甌穴式石室	2.42	1.4	0.42~	埋蓋あり、箱式石棺を模倣			中期	藤山町誌
31	甌穴式石室	3	0.54	0.4	埋蓋あり、箱式石棺を模倣			中期	藤山町誌
32	甌穴式石室	2~	1	6.6				中期	藤山町誌
33	甌穴式石室	—	1	—				中期	藤山町誌
34	甌穴式石室	3.1	0.7~0.75	0.85	削付木棺			中期	藤山町誌
35	箱式石棺	1.9	0.35~0.38	0.3	甌穴式石室と類似			中期	藤山町誌
36	甌穴式石室	1.5?	0.4	0.2	下部遺構、箱式石棺の手法を採用			中期	藤山町誌
37	粘土床	1.43	0.3	0.25				中期	藤山町誌
38	甌穴式石室	2	0.61	0.61	門扉埋蓋あり			中期	藤山町誌
39	甌穴式石室	0.41~	~0.6	0.5~	中心部より平れる			中期	藤山町誌
40	甌穴式石室	2.76	0.7~0.73	0.6~				中期	藤山町誌
41	甌穴式石室	1.7	1	—				中期	藤山町誌
42	箱式石棺	1.86	0.45	—	二重蓋あり、石室加工組合せ			中期	藤山町誌
43	箱式石棺	1.70	0.48	—	埋蓋あり、木材加工組合せ			中期	藤山町誌
44	箱式石棺	1.91	0.5	—	埋蓋あり、木材加工組合せ			中期	藤山町誌
45	甌穴式石室	1.8	0.63	—	埋蓋あり、箱式石棺の手法を採用			中期	藤山町誌
46	甌穴式石室	1.8	0.45	0.3				中期	藤山町誌
47	箱式石棺	1.75	0.4	0.27	(扁形蓋)			中期	藤山町誌
48	箱式石棺	0.6	0.3	0.17	小塚型?			中期	藤山町誌
49	甌穴式石室	1.65	0.27~0.4	0.42				中期	藤山町誌
50	甌穴式石室	2.68	0.61~0.72	0.4~0.45	埋蓋あり、箱式石棺の手法を採用			中期	藤山町誌
51	甌穴式石室	2~4.25	0.7~0.8	0.4	埋蓋あり、箱式石棺としては特異			中期	藤山町誌
52	木棺蓋	3.15	0.6~0.7	0.2	(扁形蓋)、埋蓋あり			中期	藤山町誌
53	甌穴式石室	5.25	0.7	0.7	埋蓋あり			中期	藤山町誌
54	甌穴式石室	2.7	0.5	—				中期	藤山町誌
55	甌穴式石室	6.6	0.8	—				中期	藤山町誌
56	粘土床	—	—	—				中期	藤山町誌
57	甌穴式石室	—	—	—				中期	藤山町誌
58	甌穴式石室	4	1.2	1.2				中期	藤山町誌



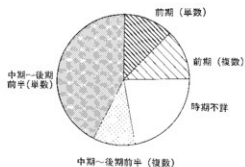
別表古墳の時代別

(前期としたものには、中期に属する可能性のあるものも含まれる)



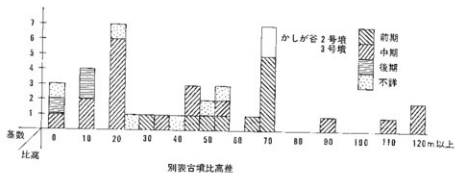
別表古墳の時代細別

(前期としたものには、中期に属する可能性のあるものも含まれる)



別表古墳の主体部数

(単数としたものには、他に主体部のあるものも含まれる。特に前期にその傾向あり)



香川県内、円墳・方墳一覽表 Ⅱ

No.	名称	所在地	地形	標高	北高	東高	南高	西高	傾斜高差	築墳	築者
39	辨山 1 1 号	(旧)城瀬町羽塚浦山	丘陵頂部	86	25	5	12		1.5		
40	辨山 3 号	(旧)城瀬町羽塚浦山	丘陵頂部	66	20	円	13.5~15		2.5		
41	辨山 4 号	(旧)城瀬町羽塚浦山	丘陵頂部	60	20	円	8		~1		
42	鹿上 山	(旧)多度津町鹿上山方	平地	5	0	円	38~		5.7	疑跡?	
43	鉢伏山 1 号	(旧)与北町字北谷	丘陵緩傾			円					
44	鉢伏山 2 号	(旧)与北町字北谷	丘陵緩傾			円					
45	谷	(旧)大蔵町1509	地根先端	97	70	円	10~11				
46	深尾 南 方	(旧)三野町大見深尾	丘陵頂部	100	70	円	7				
47	鹿殿カンス塚	(旧)流岡町鹿殿	丘陵先端	53	45	円	27.5	3.5		外濠列石	
48	室本丸山	(旧)室本町丸山	丘陵頂部	40	35	円	25	4		葦石	円墳、形家
49	赤岡山 3 号	(旧)大野原町大守中取	低丘陵				24	3.5		四重葺石	

主要文献以外には、新編香川叢書考古編、香川の前期古墳等で述べた。
所在地で(小)は小豆郡、(大)は大川郡、(高)は高松市、(取)は取州市、(丸)は丸亀市、(鏡)は綾歌郡、(仲)は仲多度郡、(善)は善通寺市、(三)は三豊郡、(鏡)は観音寺市をさす。
数値の単位は(m)~については、次の用法による。 a~(a以上)、~a(a以下)
標高・北高については、およその数値を用いた。
本表での近傍とは、地図上の直線距離にして、1km未満をさす。

参考文献

- 「新編・香川叢書 考古編」香川県教育委員会 1963
- 「石清尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会 1973
- 六車恵一「讃岐弥生土器聚成図録・文化財協会報 特別号第1集」香川県文化財保護協会
- 松浦正一「下笠居村史」下笠居村史編集委員会 1956
- 「讃岐青銅器図録」瀬戸内海歴史民俗資料館 1983
- 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究报告第十二冊 1933
- 渡部明夫・藤井雄二「鶴尾神社4号墳調査報告書」高松市教育委員会 1963
- 寒川知治「横立山塚古墳・香川県埋蔵文化財調査年報 昭和54年度」香川県教育委員会 1980
- 讃岐古墳文化研究会・森下浩行「高松市鬼無町今岡古墳とその組合式陶棺」香川考古刊行会 1983
- 青井常太郎「讃岐香川郡志」香川県教育会香川郡部会 1944
- 高松市教育委員会文化振興課「相作牛塚・文化高松第6号」高松市文化協会 1984
- 「勝賀城跡保存会だより」勝賀城跡保存会 1985
- 香川大学教育学部歴史学研究室「鬼無町平木古墳群・文化高松第6号」高松市文化協会 1984

№	主体部	全長	幅	高さ	主要部特色	遺物	調査号	時期	主要文献
38	指上木	3.75	0.4		(笠原遺跡) 土器碎片、瓦片、木片	磁器1、漆器1、刀子2	1947(47)245	中塚中葉	岡山古墳群
39	指上木	3.5	0.50-0.8		(高塚遺跡) 埴土、木片、陶器等	磁器1、漆器1			
40	瓶穴式石室	2	0.2		(西味古墳) 埴土中央付	埴土器1、土刀2、鉄器1			
41	瓶穴式石室	2	0.5	0.4	埴土中央	埴土器1、土刀1、埴器13、刀子2、土玉、銅先、鳥具			
42	指式石棺	2	0.8			みょうどう土1、内神内輪1、銅器1、鍍金土玉1、鍍金土玉19、鍍金土玉1、鍍金土玉1、直刀欠			
43	瓶穴式石室	2.3	0.45-0.53	0.4	本塚、指式石棺の手法を採用	付随品類多岐、鉄器、ガラス玉			
44	瓶穴式石室	3.36	0.5		指式石棺の手法を採用	鉄剣			
45	瓶穴式石室	3.4	0.9	0.7	埴土中央?	鉄器2、銅鏡1、ガラス小玉3等			
46	指式石棺	3.5	0.35						
47	瓶穴式石室	—	0.8	0.7	指式石棺	銅鏡2片、付随品、鉄器、鉄鏡、勾玉			
48	瓶穴式石室	1.67	0.3-0.4	0.25	指式石棺の手法を採用	鉄鏡1			
48	瓶穴式石室	—	1.4	1.5	指式石棺埋納	直刀2、鉄鏡			
48	瓶穴式石室	—	1.4	1.6		直刀、鉄鏡			
49	瓶穴式石室	1.45	0.45		中央やや西より	付随品			

秋山忠「勝賀城跡」高松市教育委員会 1979

春川知治「勝賀城跡Ⅱ」高松市教育委員会 1980

福家重雄「上笠原村史」善川郡上笠原村公民館 1952

「寒川町史」寒川町史編集委員会 1985

「富丘山頂上古墳・史跡名勝天然記念物第14」香川県 1950

渡部明夫「松ヶ丘古墳調査概報」香川県教育委員会 1975

松本豊胤「高松市門前寺遺跡調査概報」内苑寺遺跡発掘調査団 1971

谷田古墳発掘調査団「谷田古墳発掘調査概報・文化財協会報 昭和58年度」1983

工藤一枝「讃岐の前方後墳」香川史学8」香川歴史学会 1979

「弘法寺山林古墳・史跡名勝天然記念物調査報告第8」1937

「香川の前期古墳」日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会 1983

渡部明夫「末岡古墳調査概報」香川県教育委員会 1976

亀井芳文・大山真充・松本敏三「川上・丸井古墳発掘調査概報」長尾町教育委員会 1983

森井正「高松市木島丸山古墳」香川県文化財調査報告第8」香川県教育委員会 1966

渡部明夫・大山真充ほか「岡の御堂古墳群調査概報」綾瀬町教育委員会 1977

「香川県文化財調査報告第10号・特集岡山古墳群調査概報」香川県教育委員会 1969

丹羽佑一「讃岐中期前田の研究上編」香川史学第14号」香川歴史学会 1985

六車恵一「大井七ヶ塚第四号墳発掘調査概報」寒川町教育委員会 1964

松本敏三「権八原古墳群発掘調査概報」国立科学大学院補予定地内埋蔵文化財発掘調査団 1975

渡部明夫「龍王山古墳調査概報」香川県教育委員会 1977

「岩崎山古墳・史跡名勝天然記念物調査報告第5」香川県 1930

岩田隆・西谷れい子「高松市北山古墳発掘調査概報・文化財協会報 特別号11」香川県文化財保護協会

「高松市赤白山古墳調査概報」赤白山古墳発掘調査団

六車恵一・福島吉記「大川郡北地古墳・文化財協会報 特別号8」香川県文化財保護協会 1967

六車恵一「大川郡内苑見箱式石棺二例について」文化財協会報 特別号6」香川県文化財保護協会 1963

「長尾町史」長尾町史編集委員会 長尾町刊 1965

上原肇「特殊なる歴史的要素を発見したる讃岐岡田窪村山崎の古墳に就いて」考古学雑誌第11号第6号」1921

「藤田共済会郷土博物館・第6回陳列品解説要」1926

松本豊胤 郷土資料室陳列品目録「古墳その他赤白山と津頭塚」第6期展示 香川県文化会館 1970

松本豊胤ほか「岡山古墳群」岡山古墳群発掘調査団 1974

「大見村深尾古墳・史跡名勝天然記念物調査報告第10」香川県 1939

「観音寺市誌調査編」観音寺市誌増補改訂版編集委員会 1985

「丸山古墳とその石棺・史跡名勝天然記念物調査報告第14」香川県 1950

渡部明夫ほか「西十居古墳群」西十居古墳群発掘調査団 1983

松本豊胤・秋山忠・松本敏三「葛島」香川県教育委員会 1974

「岡窪村史」香川県高松市門前公民館1957

斎藤常雄「日本の古代遺跡8 香川」保育社 1983

高橋邦彦・森井正・六車恵一・松本豊胤「さぬきの遺跡」美巧社 1972

律令期に笠居郷とされた地域には、古墳時代前期（4世紀）に、横立山経塚^③、原経塚古墳、かしが谷2号墳、中期前半（5世紀前半）に、今岡古墳^④が築造されるが、中期後半（5世紀後半）に属するものは現在不明であり、約100年以上の空白期間の後、後期後半（6世紀後半）に神高古墳群^⑤等の横穴式石室墳群が突如として出現する。

しかし、この様な古墳群の変遷は、神高古墳群を除いて、各墳の明確な時期区分に基づいているものではなく、各々への不十分な情報と他地域の古墳群の展開を参考に想定したものである。各墳の年代には約50年の幅があり、25年単位の現在の研究レベルには程遠い精度である。したがって、この幅年による当地域古墳群の展開は、当然ながら非常に不十分なものであり、多くの重要な変化を見落としたものになることが予想される。しかし、それでもなお、ここで当地域の古墳群の展開を進め様とするのは、かしが谷2・3号墳の発掘調査の成果によって、それを幾分か発展させられるのではないかという希望と、かしが谷2・3号墳自身の性格を明らかにする為にはそれが必要不可欠の手続であるという確信を抱くからである。

本地域の最古の古墳は、五色台の東麓或いは、勝賢山の西麓にあって、生島湾を見下ろす横立山経塚と原経塚両古墳と推測される。それは共に横石塚であり、他地域の横石塚が遅くとも中期前半には築造されなくなる状況を第1の根拠にしている。原経塚は横石塚という以外の情報はないが、横立山経塚の他の情報は上述の推測を助けるものである。

横立山経塚は全長37mの前方後円形を呈し、後円部に長軸を東西方向にとり、長さ約5m、幅0.8～1m、高さ0.9～1.1mの畝下において長大な部類に入る竪穴式石室を設け、後円部からは器材埴輪片（形象不明）、円筒埴輪片（川西編年畿内Ⅱ期に相当^⑥）を出す。又、後円部積石、前方部盛土という特殊な墳丘構築法をとる。畝下の他墳と比較すると、坂出市の箭ヶ松古墳^⑦に似るが、埴輪を出す点で大きく異なっている。しかし、横石塚で埴輪を出土するものは少なく、東隣の石清尾山横石塚古墳群^⑧と木墳に限られるところから、或いは地域性とも推測される。箭ヶ松古墳がその前方部がバチ形に開く点より古式に位置づけられていることを考慮すると、横立山経塚古墳は箭ヶ松古墳よりやや後出であるが、近い時期に位置づけられよう。さらに石棺を出していない点も合わせると4世紀の第3四半期あたりであろうか。なお、箭ヶ松古墳との類似はこれだけではなく、古墳群の展開にも認められる。すなわち、箭ヶ松古墳に近接して横石前方後円墳ハカリゴロ古墳^⑨が分布するが、この関係を横立山経塚古墳と原経塚古墳間に求めることができるからである。備前瀬戸の良港を臨む点まで一致してい

る。後でいう古式沿岸部古墳として類型化される一群に属する。

ところで横立山塚塚と同型式の墳丘は、他に普通寺市野田院古墳⁶、丸山1号墳⁷、津田町鶴の部古墳⁸、大川町川東古墳⁹と、広域に散在するが、その位置が非常に重要である。つまり、野田院古墳は讃岐前期前方後円墳群の西端に位置し、川東古墳は石棺の出土が伝えられる白鳥町の大日山古墳¹⁰を除くと、東端に位置するのである。この2つの古墳は、石棺出現以前の讃岐前方後円墳分布域の東西を限っているのである。又、その内部にあって、爺ヶ松古墳は丸亀平野と坂出平野の結節点、金山・城山の峠に位置し、鶴の部古墳は津田湾東端の鶴の部半島の基部（当時湾内の小島）に位置するという様に、交通の要衝を占めているのである。以上を要約すると、これら独特の墳丘型式をとる古墳は特定の政治勢力の存在を示し、その分布はその範囲を示すことが推定されるのである。それは、原讃岐国とでも呼び得るまとまりである。

したがって、横立山塚塚に關係する豪族達はその一翼を倚う勢力であったことが推定されるのであり、さらに重要なことは、畿内政権の瀬戸内海掌握と地域豪族勢力の抵抗という政治的基調にあって、本地域が畿内、讃岐両勢力にとって非常に重要な地域であったことが推測されるのである。この点は、埴輪出土にみる、讃岐の雄一石清尾山積石塚群との共通性にも認められる。

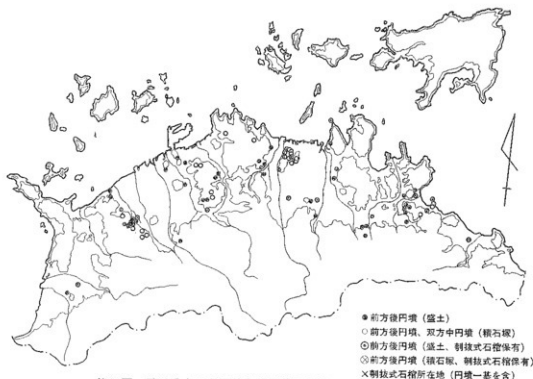
ところが、生島湾を臨むこの地区の古墳築造は2代で終焉した。前後して出現したのがかしが谷古墳群と推測される。勝賀山東麓、本津川、香東川下流域に広がる沖積地を臨む尾根先端近くに立地している。前期末のことであろう。その編年は、2号墳の竪穴式石室は前期の積み方を踏襲するが小型であること、弥生時代墳丘墓の伝統である外護列石を設けること、2号墳に後続する3号墳1号石室から直刃鎌が出土していることから推測される。一方、隣接して全長60.5mの盛土前方後円墳、今岡古墳が同様の立地を見せる。この古墳は、前方部から組合わせ空心罎長持形陶棺が出土したことで著名であるが、必ずしも年代が明らかであるとは言い難い。ただ、この陶棺が長持形石棺に似ていること、前方部の埋葬施設に竪穴式石室を用いていないこと、円筒埴輪、器材埴輪が墳丘各所から出土しているが、その円筒埴輪は川西編年畿内Ⅲ期に相当する¹¹ことから、5世紀前半、それも早い時期が想定されている。

したがって、かしが谷古墳群と今岡古墳群は連続して築造、もしくは一部重複の可能性が大きい。これより本地域の該期の古墳群の展開を求めると、小型円墳群から前方後円墳への変遷、もしくは、小型円墳と前方後円墳の併行関係が想定されるのである。これを他地域で検討すると、東では津田湾の岩崎山古墳群¹²が類列として挙げられる。5基の古墳が津田湾を臨む岩崎山の尾根上に築造されている。1～3、5号が小型円墳もしくはそれと推測されるものであり、残りの4号が盛土前方後円墳で尾根先端に立地する。4号墳の後円部の小型竪穴式石室から石棺1基が出土している。石棺は特殊な形態の上陶棺のタガに類するものが浮彫されており、今

岡古墳陶棺との様式上の共通性も指摘できる。4号墳には石棺や副葬品から4世紀末の年代が与えられている。又、石剣、車輪石等の副葬品が知られ、畿内政權との密接な関係も想定される。一方、今岡古墳は後円部埋葬施設、及び副葬品の内容が不明であり、その性格を明らかにすることは困難であるが、出土陶棺が畿内と讃岐の石棺の交流によって生み出されたものと推測される上、積石塚伝統地域の中に築造された盛土前方後円墳という位置づけは、この古墳も又畿内政權と密接な関係をもっていたことを推定させるものである。以上より、これら2つの古墳群は群構成はもとより、主墳の性格も近いことが明らかである。

西方に転ずると、多度津町の黒森山古墳群が挙げられる。多度津沿岸部を眼下に収める黒藤山の山頂から東に延びる尾根上に1～3号の小型円墳とその先に全長30mの盛土前方後円墳、4号、箱式石棺、5号が分布する。4号墳は内容が明らかでないが、墳丘形態から前期に位置づけられている。

近接するものとして、五色台西北部山腹のすべり山、経の田尾古墳群がある。全て積石塚で、すべり山古墳群は急斜面に1・3号の円墳と、2号の方墳が連接する様に築造され、その先に全長31mの前方後円墳と推測される経の田尾古墳が分布する。すべり山古墳群は積石塚であること、石室の形態、構築法から前期に位置づけられ、経の田尾古墳は、崩壊はなはだしく、内容は不明であるが、積石塚ということより、一連のものとして扱われている。



第23図 香川県内の主要前方後円墳分布図

以上、かしが谷・今岡古墳群に類するものを挙げると、全て前期、もしくは前期から中期初頭の古墳群であり、その上沿岸部に位置することがわかる。この要因には当然のことながら、特定の政治的・社会的状況を想定し得るが、それは又、かしが谷・今岡古墳の性格を規定するものである。よって次に少しこの点について検討する。

県下の沿岸部古墳には二種があり、一種は前期の早い段階から始まるもので、石清尾山古墳群、タイバイ山¹³・白砂古墳群¹⁴が属する。少し遅れるが、釜ヶ松・ハカリゴロ古墳群、横立山経塚・原経塚古墳群がこれに入る。これらはタイバイ山・白砂古墳群を除く全てが積石塚である点、非常に土着的性格をもつ。今一種は前期末に中心を置く古墳群で、津田湾、宇多津、多度津の古墳群が属する。やや早いものが高松市茶臼山古墳¹⁵もこれに入る。かしが谷・今岡古墳もこれに入る。この種の特徴は、その殆んどが内陸部の前方後円墳群と河川によって連絡されていることである。かしが谷、今岡古墳群には本津川中流の全長30mの前方後円墳、御厩天神社古墳¹⁶が対応するかもしれない。しかし、内陸部の前方後円墳が相対的に大型である点を考えると、或いは上流の石舟天神社の泉下最大級の石棺¹⁷を出した古墳が相応しい様にも思える。勝賀山の南、袋山の袋山、布掛、相越各前方後円墳は実体が不明である。又、岩崎山4号墳、高松市茶臼山古墳、今岡古墳等がそうである様に畿内の色彩を濃く帯びた古墳が認



第24図 香川県内の沿岸古墳群と内陸古墳群の関係図(線のつながり)

- | | | | |
|---|---|--|--|
| <p>A 古式沿岸部古墳群</p> <p>1. 石清尾山積石塚古墳群</p> <p>2. 横立山経塚・原経塚古墳群</p> <p>3. 藤ノ田尾・オベリ山古墳群</p> <p>4. タイバイ山・白砂古墳群</p> <p>5. 釜ヶ松・ハカリゴロ古墳群</p> | <p>B 新沿岸部古墳群</p> <p>6. 津田湾南部古墳群</p> <p>7. 津田湾北部古墳群</p> <p>8. 高松島古墳</p> <p>9. 高松市茶臼山古墳</p> <p>10. 今岡・かしが谷古墳群</p> <p>11. 宇多津古墳群</p> <p>12. 多度津古墳群</p> | <p>C. 内陸部古墳群</p> <p>13. 富田茶臼山古墳</p> <p>14. 三谷石舟古墳</p> <p>15. 御厩天神社古墳</p> <p>16. 石舟天神社石棺</p> <p>17. 快天山古墳</p> <p>18. 普通寺古墳群</p> | <p>BとCの関係</p> <p>I 津田川系(6, 7, 13)</p> <p>II 春日川・新川系(8, 9, 14)</p> <p>III 本津川系(10, 15, 16)</p> <p>IV 大東川系(11, 17)</p> <p>V 私田川系(12, 18)</p> |
|---|---|--|--|

められるのもこの種の特徴の一つである。

この様な沿岸部古墳の二種は出現時期の差によって捉えられたものであるが、瀬戸内海を舞台として展開した前期の政治・社会の二つの画期を表象するものである。

第一の画期は古墳時代の開始期—畿内政権を核とした瀬戸内新体制の開始期—畿内政権の沿岸部、内陸部双方の勢力との個別の交渉による支配ネットワークの構築、第二の画期は地域勢力の政治的統合の伸長と畿内政権の支配体制強化という相矛盾する政治課題の衝突・調整、という特色を持つ。第二の画期にあって、畿内政権は沿岸部古墳群間の横の繋がりが—海岸線グループ、又沿岸部古墳群と内陸部古墳群の縦の繋がりが—河川グループ、内陸部古墳群間の横の繋がりが—内陸部グループを分断することによって支配権の拡大・強化を計ったことが想定されるのである。石棺に観察される畿内勢力と畿内勢力の交流もこの新しい政治状況に基づくところと推察されるが、この状況が展開されて始めて、かがが谷・今岡古墳群の出現経緯と内容が意味のあるものとなるのである。

すなわち、高松平野の沿岸部古墳として、西から横立山経塚・原経塚古墳群、かがが谷・今岡古墳群、石清尾山古墳群、高松市茶臼山古墳・長崎鼻古墳⁹、が知られるが、横立山経塚・原経塚古墳群と石清尾山古墳群は上述した様に積石塚である以上に共通点を持ち、一方かがが



第25図 香川県内の前方部盛土積石塚古墳と前期末から中期初頭
の主要古墳分布図（横のつながり）

- | | | |
|--|--|--|
| <p>A 前方部盛土積石塚古墳</p> <p>1. 瀬の部古墳</p> <p>2. 川東古墳</p> <p>3. 横立山経塚古墳</p> <p>4. 蛸ヶ松古墳</p> <p>5. 丸山1号墳</p> <p>6. 野田院古墳</p> | <p>B 前期末から中期初頭の主要古墳</p> <p>7. 富田茶臼山古墳</p> <p>8. 大宮古墳</p> <p>9. 三谷石舟古墳</p> <p>10. 経塚山古墳</p> <p>11. 御殿天神社古墳</p> <p>12. 石舟天神社古墳</p> <p>13. 快天山古墳</p> <p>14. 鹿臼山古墳ほか善通寺古墳群</p> | <p>実線は日をつないだもの
はば、南海道に一致するが11、
12は頭で少し南による</p> |
|--|--|--|

谷・今岡古墳群と高松市茶臼山古墳も一つにまとまる。よって、性格を異にする古墳群が交互に分布することになる。図式的には、畿内的・畿内的・畿内的・畿内的と表すことができる。この分布状況からかしが谷・今岡古墳群と高松市茶臼山古墳の勢力は、沿岸部古墳勢力の分断、特に讃岐の雄一石清尾山積石塚古墳群勢力の牽制を目的とする畿内政権の楔り入れによって勃興した勢力であることがわかるのである。かしが谷古墳群の様な径20mに満たない小型円墳しか築造されなかった地域に60mを越える前方後円墳・今岡古墳が築造された理由、これら古墳群が西隣する横立山経塚・原経塚古墳群と何らの連絡も認められない理由の多くは、この新政治基調に求められるのである。

この戦略が功を奏してか、石清尾山積石塚古墳群は中期前半でその築造を終える。しかしこれはただ一人石清尾山積石塚古墳群に起こった現象ではなく、それに前後して普通寺地域より東の各地前方後円墳群に共通するのである。おおよそ中期中頃までには当該地域の前方後円墳の築造は終焉する様である。ここで注目すべきは、各地前方後円墳群の最終段階の古墳は群中最大規模を誇ることである。大川町富田茶臼山古墳(約145m)⁹⁾、長尾町大宮古墳(100m以上)、高松市三谷石舟古墳(約90m)¹⁰⁾、綾南町秋天山古墳(約100m)¹¹⁾等がそれである。そこに各地勢力の政治的・経済的成長の跡を認めることもできるが、その飛躍的な大規模化は、その上に畿内政権との間の増大する政治的・社会的緊張が新政治基調によって一挙に臨界点まで達し、より広い地域の豪族や、農民をも含めた広範な勢力の結集が計られた結果であろう。

なお、上記した内陸部の大型前方後円墳を結ぶラインは、律令期の南海道におおよそ重なる。実態は不明であるが、そこに古墳群に象徴される勢力のまとまりが想定されるのである。それは上述した原讃岐国の第2段階に位置づけられる。又、沿岸部古墳と内陸部古墳の河川を通じた繋がりは、弥生時代以来の伝統と推察し得るが、律令期の郡はこれの発展整備した形態であろう。この様に中期半ばまでに、律令期の政治的・社会的まとまりに類する程のものが、形成されるにもかかわらず、中期後半にはそれに逆行する古墳群の展開が認められる。

すなわち、普通寺以东各地に、径20~10mの中小円墳群¹²⁾(寒川町大井七ツ塚、長尾町川上古墳、綾南町岡の御堂古墳群等)が形成されるのである。それは非常に地域的な竪穴式石室と、類似した副葬品(鉄製武器一式)を持つ古墳で、前代の大勢力の衰退したもの、前代から続くセカンドクラス、新興クラスの三通りの被葬者が想定されるが、鉄製武器の生産と流通、その墳丘形態と規模、竪穴式石室の地域性から、中期後半にあって讃岐にまとまった勢力は無く、畿内政権が各地豪族を個別に直接支配してしまったことが知られるのである。

なお、笠居郷には現在までのところ、この種の古墳は知られていない。旧勢力は完全に絶たれ、新興勢力も未成長だったのであろうか。しかし、今岡古墳の東方、本津川の右岸、香東川の間に相作牛塚¹³⁾が築造される。鉄剣、馬具、挂甲、円筒埴輪、家形・人物の形象埴輪が出土し

ている。典型的な該期の古墳であるが、時期は6世紀前半まで下がる筈である。本津川を伏んで政治勢力の交差があったことも推察される。

次に当地域で古墳の築造が再開されるのは5世紀末である。型式も横穴式石室と一新され、分布も拡大されている。

勝賀山西麓に桑崎古墳、その北方中ノ山の南麓に弾正原古墳が分布するが、実体は不明である。

勝賀山の東麓、本津川、香東川によって開かれた沖積地に臨んで、北から沢池古墳、かしが谷4号墳、善師垣古墳群が知られる。さらに南方、神高池周辺に神高古墳群が分布する。これら後期後半横穴式石室墳群の内、内容がある程度判明しているのは神高古墳群だけである。よってこの古墳群を中心に当該期の古墳群の展開を検討する。

その立地をみると全て、山麓の浅い谷間の斜面に築造され、その前面に桑崎古墳なら桑崎の集落が、弾正原古墳には弾正原集落が、神高古墳群は大きく2つに分かれて、平木1～3号墳と大塚には山口の集落が、古宮権現社古墳を中心とする古墳群には神高の集落が開ける。現代の各集落が何時から始まったのかは不明であるものの、古墳の被葬者の主たる活動舞台は、かかる集落を大きく越えない範囲であったことが推測される。さらにこの期に至って突如として出現した背景として、古墳の立地する谷の開発が進捗し、それによって経済的・社会的地位の向上を果たした人々が多数生み出された状況が想定できるのである。よって被葬者は開発領主の性格を強く持った人物であるといえるが、石室型式からして、各墳には彼を家長とする村落の有力家族が納められたとされる。彼らは村落の上層部を形成していたと推察されるが、神高古墳群の構成から上層部の社会的構成を検討する。

神高古墳群は現在9基の古墳が知られるが、大きく2グループに分けられる。北の平木1号墳グループと南の古宮権現社古墳グループである。平木1号グループは谷奥部に平木1～3号墳が集中し、先端近くに大塚古墳が1基分布する。玄門平面形は全て突出形を呈し共通するが、規模に大、中、小の別があり、大が平木1号、大塚古墳(5m台)、中が平木3号(4m弱)、小が平木1号(3m強)となっている。築造・使用期は、平木1号が6世紀末から7世紀前葉、平木2号が7世紀前葉である他は不明である。以上の各墳の情報から平木1号グループの構成を検討すると、グループは大きく2つに分かれ、各々に大クラスの一基が中核として存在する。大塚古墳と組になる中・小墳は現在不明であるが、平木1～3号墳では、1号と2号が隣接して3号に対峙するところから、1・2号と3号の構成となる。ところが平木1号と2号は築造期が前後し、1号から2号への変遷が想定されるから、1号と3号、或いは2号と3号の2基構成になる。この2基は以上述べたところから上位と下位の関係を有する。以上を要約するに、平木1号グループは2つの有力集団からなり、各集団は1つ以上の有力家族か、

2つ以上の場合には上・下の関係を保有する複数の有力家族から構成されていたと推定される。
なお、2つの有力集団の上・下関係は不明である。

転じて、古宮権現社古墳グループの構成を検討すると、ここでは谷奥部に山野塚古墳、中央部に古宮権現社古墳、先端近くに神高池古墳群と大きく3つに分かれる。山野塚は玄室長5.75mで平木1号グループの平木1号墳、大塚と対比されるが、規模はそれを上回る。神高池古墳群は殆んどが崩壊している為その実体は不明であるが、おそらく平木1～3号墳と同様の群構成を展開したものと推察される。問題は古宮権現社古墳で、玄室長6.14mと上述の大・中・小の区分を大きく越え、古宮権現社古墳グループだけでなく、神高古墳群全体に卓越する。又、同墳からは鉄地金銅張りの鞍飾りや、大型金環、自然釉豊かな須恵器の優品が出土し、規模だけでなく副葬品からも被葬者の卓越性が認められている。さらに、玄門平面形も中間形で、山野塚が羽板形であるのと共に突出形他墳と異なっている。これら全ての要素が古宮権現社古墳の卓越性を証明するものであり、古墳群中の主墳としての位置を際立たせている。なお、玄門梁石に連接する玄門第1天井石は一段低く、あたかも廂の観を呈するが、類例が大川町八剣古墳⁸、坂出市綾織塚古墳⁹、新宮古墳¹⁰、大野原町純貨塚古墳¹¹と各地の主墳クラスに知られる。これも又古宮権現社古墳の卓越性を示すものであるが、各地の主墳クラスがそれを採用しているところをみると、その卓越性は神高古墳群中の他墳との比較の上で、言い換えれば、神高古墳群の中であって付与された性質という限定条件を必要とするものである。

以上より、神高古墳群の構成とそこから推定される被葬者達の社会構成を検討すると、神高古墳群は平木1号墳と古宮権現社古墳を主墳とする2つの大グループからなる。このグループはおそらく村を単位としたものであろう。そして大グループは2～3つの小グループから形成され、小グループは1～3基程度の古墳から形成されている。各墳は家族墓と規定され、血縁関係の濃度が築造空間の遠近を決定することを前提にすると、小グループは同一血縁団から構成されていたと推測される。各墳の被葬者は村内の有力家族とされるが、とりわけ古宮権現社古墳の被葬者は際立っており、それら有力家族の盟主として、2つ或いはそれ以上の村落を統括する立場にあったことが知られるのである。しかし、彼の統括する範囲は狭く、前期、中期の前方後円墳被葬者と比較にならないことは、上述した様にその墓制にみる卓越性の限界より明らかである。

以上が、笠居郷の後期後半の古墳群の展開と、推測される社会の構成である。しかし、後の笠居郷に比定されるこの地域が、当時の讃岐全体からみてどの様に位置づけられるのであろうか。次にこの地域性について少し検討しておこう。

神高古墳群の一般的な玄門平面形は突出形であったが、これは坂出平野周辺と共通し、玄門平面形からすると、坂出と神高地区の古墳群は1群を形成することになる。ところが、奈良・

平安時代の文獻には、坂出と高松西部に綾氏が居住していたとの記載がある。この2つの資料をつき合わせれば、元の古墳群のまともりは、実に綾一族の先祖を示すものではなかったかと考えられるのである。そして重要なことは、これを認めれば、後に綾氏と呼ばれる氏族（原綾氏）の実体が想定されることである。すなわち、原綾氏なる一族は、畿系列に分かれ、各々の村の有力集団として集住していたといえよう。神高古墳群の被葬者は、さしずめ原笠居綾氏とでも呼び得ようか。

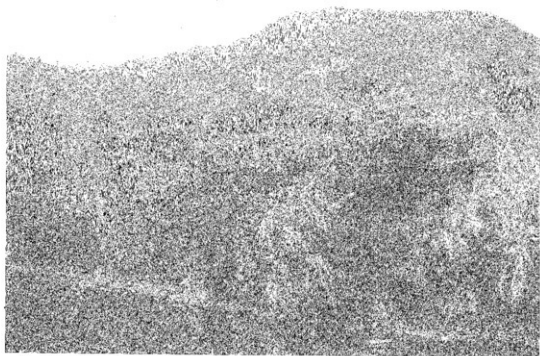
その後律令期には、綾氏の住地に園疔がひらかれ、園分寺が建立される。この地域は讃岐の政治・経済・文化の中心として、最も重要な土地となった。この地域の変遷に、笠居郷の綾氏が如何に働いたか、これは今後明らかにしなければならない重要な課題である。

注

- 1 日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会「香川の前期古墳」 1983年
- 2 森下浩行「香川考古」創刊号 1983年
- 3 高松市文化協会「文化高松」第6号 1984年
- 4 注1に同じ
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 1978年
- 5 注1に同じ
- 6 柳原未治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」 1933年
高松市教育委員会「鶴尾神社4号墳調査報告書」 1983年
- 7 注1に同じ
- 8 注1に同じ
- 9 注1に同じ
- 10 注1に同じ
- 11 注1に同じ
- 12 注1に同じ
- 13 注4に同じ
- 14 注1に同じ
- 15 注1に同じ
- 16 注1に同じ
- 17 注1に同じ
- 18 香川県教育委員会「新編香川叢書」考古編 1983
- 19 注1に同じ
- 20 徳島県博物館・徳島考古学研究グループ「シンポジウム四国の前方後円墳」 1980年
- 21 藤田憲司「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号 1976年
- 22 注18に同じ
- 23 注18に同じ
- 24 注18に同じ
- 25 注1に同じ

- 26 丹羽祐一「藤城中期印墳の研究」『香川史学』第14号 1985年
- 27 高松市文化協会「文化施設」第6号 1984年
- 28 文室と甬道の壁面が一体に近く玄門袖石が、いずれからも突き出されている形。なお、「羽子板形」は玄室と甬道の壁面が区分され玄門袖石が甬道壁面と一体となる形、「中間形」は玄室と甬道の壁面が区分され玄門袖石が、いずれも突き出ている形をいう。注3文献参照
- 29 引田町教育委員会「川北1号墳」 1985年
- 30 注29に同じ
- 31 注18、29に同じ
- 32 注18、29に同じ
- 33 「訖日本紀」延暦10年9月20日
「大政官符」天曆11年2月26日

圖 版



(1) かしが谷 2・3号墳 (矢印) 遠景



(2) かしが谷 2・3号墳近景



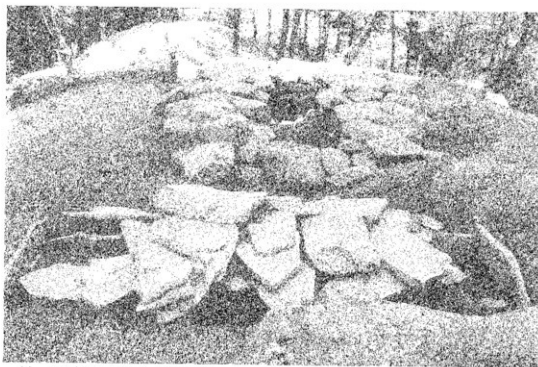
(1) 調査前 (2号墳墳丘)



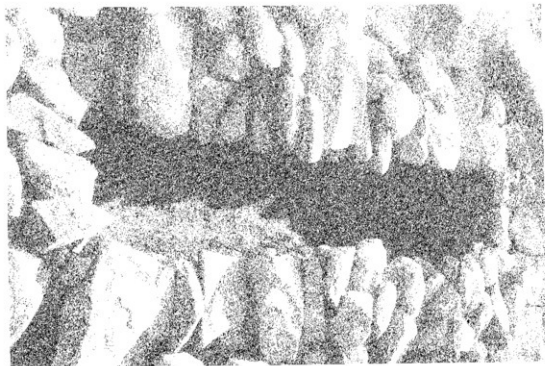
(2) 調査前 (尾根先端)



(1) 調査風景



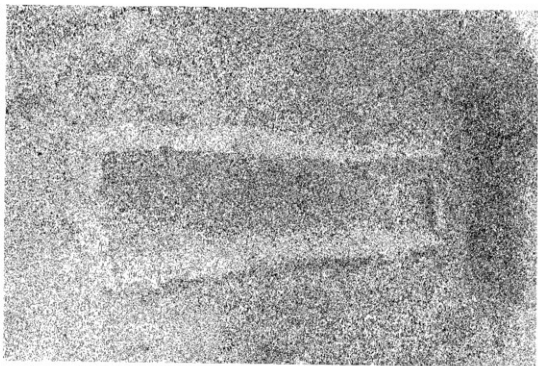
(2) 2号墳第1主体部・第2主体部



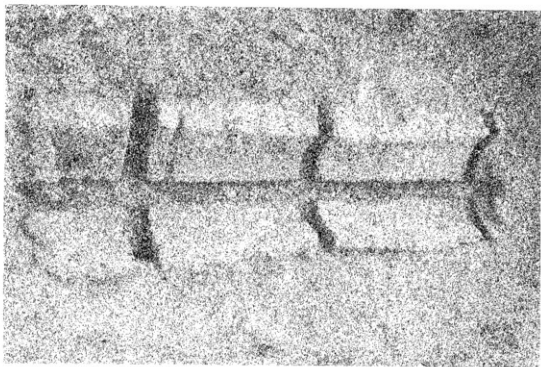
(1) 2号填第1主体部上面



(2) 2号填第1主体部底部



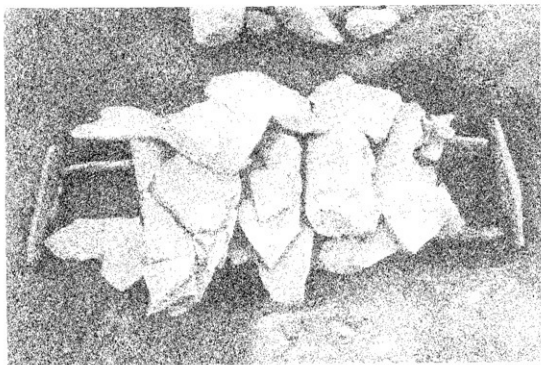
(1) 2号墳第1主体部基壇・粘土床



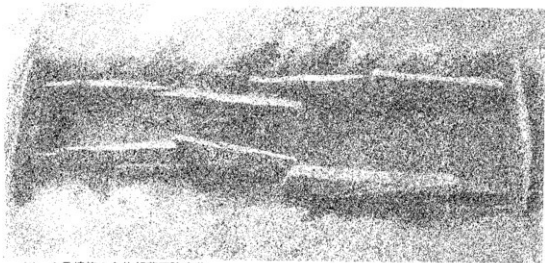
(2) 2号墳第1主体部粘土床断面



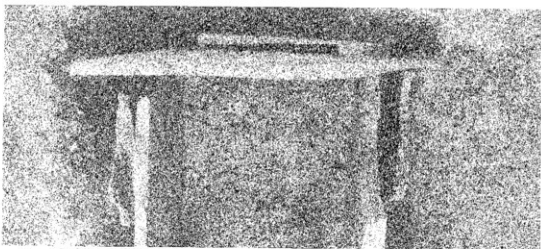
(1) 2号墳第2主体部粘土被覆状況



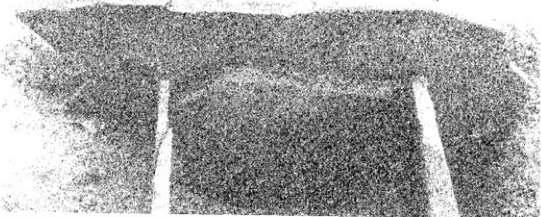
(2) 2号墳第2主体部上面



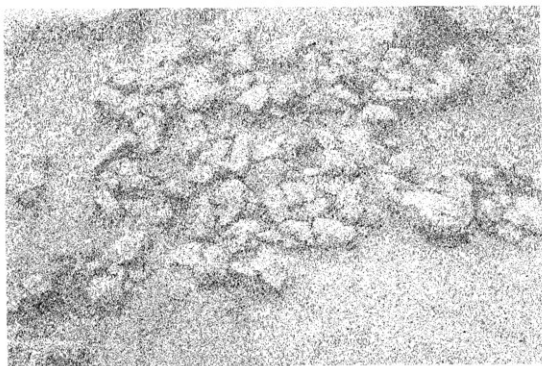
(1) 2号墳第2主体部蓋石除去後



(2) 2号墳第2主体部頭部小口



(3) 2号墳第2主体部足部小口



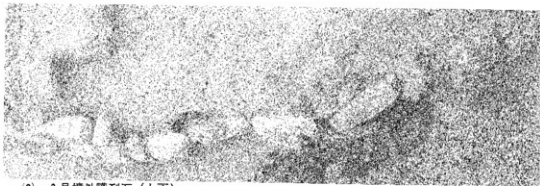
(1) 2号境外逐列石崩塌状况



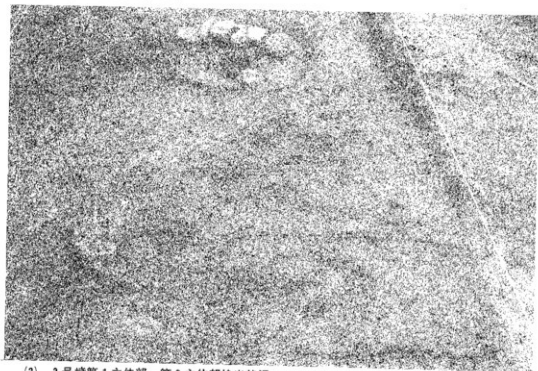
(2) 2号境外逐列石



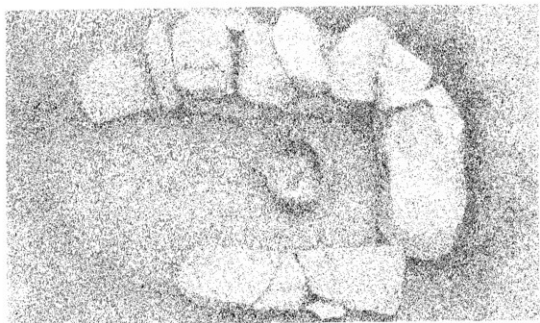
(1) 2号墳外礎列石(側面)



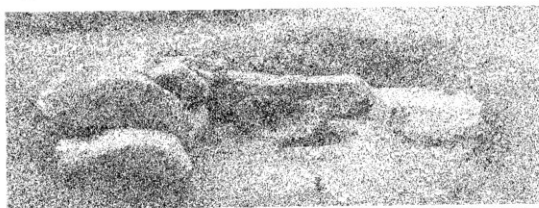
(2) 2号墳外礎列石(上面)



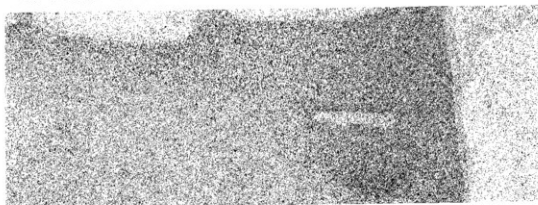
(3) 3号墳第1主体部・第2主体部検出状況



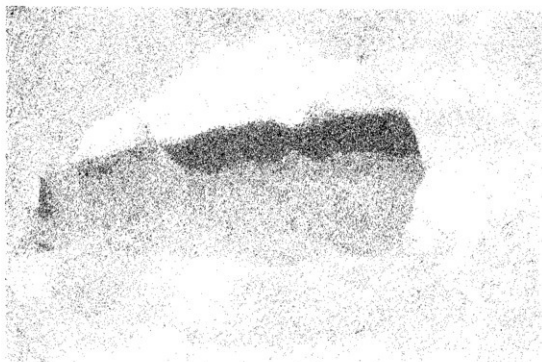
(1) 3号墳第1主体部上面(頭骨出土状況)



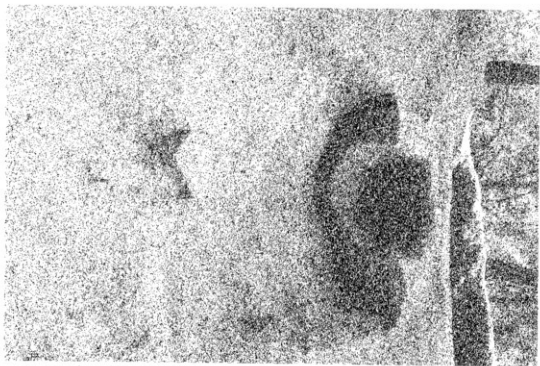
(2) 3号墳第1主体部断面(頭骨出土状況)



(3) 3号墳第1主体部鉄鎌出土状況



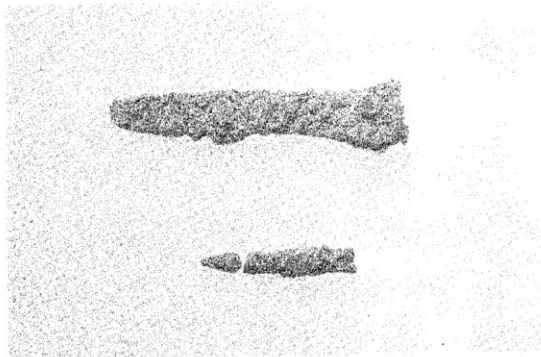
(1) 3号墳第2主体部粘土床上面



(2) 3号墳第2主体部粘土床断面



(1) 発掘状況



(2) 鉄鎌(3号墳第1主体部出土)等

かしが谷2号墳・3号墳発掘調査報告書

1986, 3

編集・発行 高松市番町一丁目8番15号
高松市教育委員会
印刷 高松市藤原町2丁目10-2
中央印刷所
